

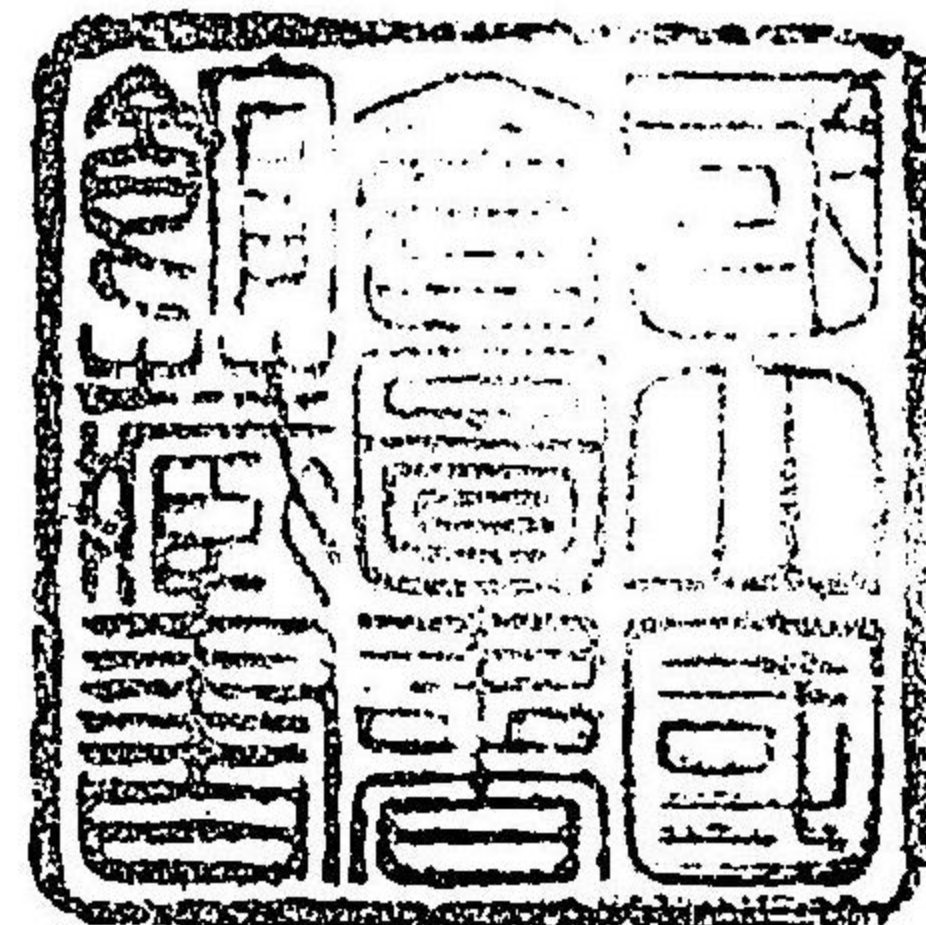
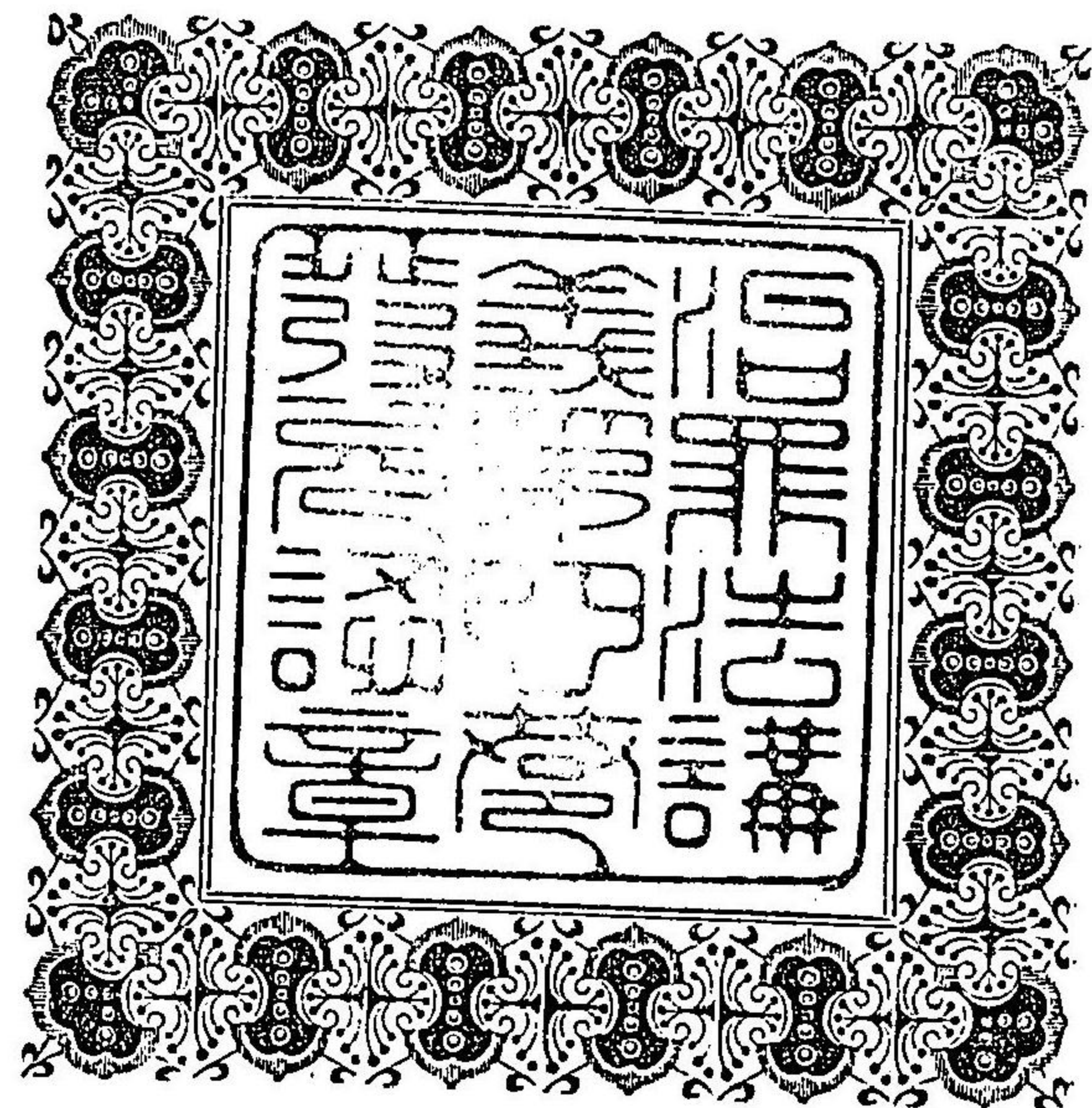
横田國臣口述 高瀨四郎筆記

治罪法講義

版權所有



327.6Y714t



337044



治罪法目錄

第五編 大審院ノ職務

第一章 上告

第二章 再審ノ訴

第三章 裁判管轄ヲ定ムルノ訴

第四章 公安又ハ嫌疑ノ爲メ裁判

管轄ヲ移スノ訴

第六編 裁判執行復權及ヒ特赦

第一章 裁判執行

第二章 復權

自第四百三十八條  
至第四百五十八條

自第四百三十八條  
至第四百三十八條

自第四百三十九條  
至第四百四十七條

自第四百四十八條  
至第四百五十八條

自第四百五十一條  
至第四百五十八條

自第四百五十九條  
至第四百八十九條

自第四百六十九條  
至第四百七十九條

自第四百七十九條  
至第四百七十六條



第三章 特赦

二

自第四百七十七條  
至第四百八十條

治罪法講義目錄

第五編

第一丁

○大審院職務ノ區別

○大審院ノ裁判法

第一章

第二丁

○上告ス可キ案件

第四百十條第四百十一條第四百十二條 第四丁

○破毀ノ原由

○免訴無罪ノ言渡ニ對シ上告ノ原由ト爲ス可カ  
ラサル條件

第四百十三條

第十五丁



○附帶ノ上告

○附帶上告ノ手續

第四百十四條

第十七丁

○上告申立ノ期限

第四百十五條

第十九丁

○上告中原裁判所ノ言渡ノ執行停止

○未決中被告人ノ身體ヲ拘束スルト否トノ言渡

ニ付テハ上告ノ有無ニ拘ハラズ直ニ之ヲ執行

スルノ理由

第四百十六條

第二十一丁

○上告申立書

第四百十七條第四百十八條

第二十三丁

○上告ノ趣意書及ヒ答辯書

第四百十九條

第二十五丁

○書記局ニ差出ス可キ上告ノ趣意書及ヒ答辯書

ノ定數

第四百二十條

第二十七丁

○上告事件ヲ大審院ニ差出スノ手續

第四百二十一條

第二十八丁

○上告ニ付テノ代言人

第四百二十二條

第三十一丁

○專任判事ノ報告書



第四百二十三條

第三十二丁

○上告申立人及ヒ對手人其趣意ヲ擴張ス可キ辯明書

第四百二十四條

第三十四丁

○開廷ノ手續

第四百二十五條第四百二十六條

第三十五丁

○上告ノ裁判手續

第四百二十七條

第三十七丁

○上告ノ本案ニ付キ棄却ノ言渡ヲ爲ス可キ場合  
○上告ノ本案ニ關セサル事項ニ付キ直ニ棄却ノ言渡ヲ爲ス可キ場合

○上告事件ニ付判決ヲ爲サル場合

○上告ヲ受理セサル場合ノ手續

第四百二十八條第四百二十九條第四百三十條第

四百三十一條

第四十一丁

○破毀ニ係ル事件ノ處分

○破毀ノ判決

第四百三十二條

第四十六丁

○大審院ノ裁判言渡ノ執行

第四百三十三條

第四十八丁

○破毀ノ事件ヲ移ス可キ裁判所

第四百三十四條

第五十丁



○大審院判決ノ効力

第四百三十五條

第五十二丁

○非常上告

第四百三十六條

第五十五丁

○哀訴

○哀訴ノ原由

第四百三十七條第四百三十八條

第五十七丁

○哀訴ニ付テノ手續

第二章

第五十九丁

○再審ノ訴ヲ爲ス可キ案件

第四百三十九條

第六十丁

○再審ノ原由

第四百四十條

第六十四丁

○再審ノ訴權ヲ有スル者

第四百四十一條

第六十六丁

○再審ノ訴ハ刑ノ消滅ニ拘ハラサルノ理由

第四百四十二條

全丁

○再審ノ訴ヲ爲スノ手續

第四百四十三條第四百四十四條

第六十八丁

○大審院ニ於テ再審ノ訴ニ付テノ裁判手續

第四百四十五條第四百四十六條

第六十九丁

○再審ノ訴ニ付テノ言渡



第四百四十七條

第七十一丁

○再審ノ訴ニ付テノ言渡ノ揭示公告

第三章

第七十二丁

第四百四十八條

全 丁

○裁判管轄ヲ定ムルノ訴ヲ爲ス可キ場合

○裁判管轄ヲ定ムルノ訴權ヲ有スル者

第四百四十九條第四百五十條

第七十五丁

○裁判管轄ヲ定ムル訴訟及ヒ判決ノ手續

第四章

第七十六丁

第四百五十一條第四百五十二條全

丁

○公安ノ爲メ裁判管轄ヲ移スノ訴

第四百五十三條

第七十八丁

○公安ノ爲メ裁判管轄ヲ移スノ訴ニ付テノ判

決

第四百五十四條第四百五十五條第七十九丁

○嫌疑ノ爲メ裁判管轄ヲ移スノ訴

第四百五十六條第四百五十七條第八十二丁

○嫌疑ノ爲メ裁判管轄ヲ移スノ訴訟及ヒ裁判ノ

手續

第四百五十八條

第八十三丁

裁判管轄ヲ移スノ訴ニ因リ原裁判所ニ於テ訴訟手續ノ停止



第六編

第八十五丁

○公判後ノ手續

第一章

全丁

○公判終結ノ言渡ニ係ル執行

第四百五十九條第四百六十條第四百六十一條第八十六丁

○刑ノ執行

第四百六十二條第四百六十三條第八十八丁

○刑ノ執行手續

第四百六十四條第四百六十五條第九十一丁

○既決犯罪表

第四百六十六條第四百六十七條第四百六十八條

第九十五丁

○刑ノ執行裁判

第四百六十九條

第九十九丁

○私訴ニ付テノ言渡ノ執行

第二章

第一百丁

第四百七十條第四百七十一條第四百七十二條第

四百七十三條第四百七十四條第四百七十五條第

四百七十六條

第一百一丁

○復權請願ニ付テノ手續

第三章

第一百四丁

第四百七十七條第四百七十八條第四百七十九條

第四百八十條

第一百四丁



○特赦申立ノ手續

治罪法講義

横田國臣  
高瀬四郎 筆記

第五編 大審院ノ職務

○大審院職務ノ區別

- 一 法律ニ背キタル裁判ヲ破毀シテ更ニ正當ナル裁判ヲ得セシム即チ上告是ナリ
- 二 事實ニ反シタル裁判ト雖モ確然タル錯誤アルキハ之ヲ破毀シテ更ニ正當ノ裁判ヲ得セシム即チ再審ノ訴是ナリ
- 三 現ニ管轄ス可キ裁判所ナキ事件ノ管轄及ヒ管轄ス可キ裁判所アリト雖モ管轄セシム可カラサル事件ノ管轄ヲ指示ス即チ裁判管轄ヲ定ムルノ訴及ヒ公安又ハ嫌疑ノ爲メ裁判管轄ヲ移スノ訴是ナリ



### ○大審院ノ裁判法

- 一 上告ニ付テハ公行裁判ナルヲ以テ通常決審ノ方法ト殆ト同シ然レ  
モ事實ニ干涉セサルヲ以テ其手續頗ル簡單ナリト雖モ其取調ハ頗  
 ル繁難ナルヲ免カレヌ
- 二 再審其他ノ訴ニ付テハ密行裁判ナルヲ以テ豫審ノ故障ヲ判決スル  
ノ方法ト殆ト同シ各本條ニ就テ説明ス可シ

### 第一章 上告

#### ○上告ス可キ案件

- 一 裁判ノ性質ヲ有シ且終審タル可キ處分ニ非サレハ上告ノ案件ト爲  
ス可カラス故ニ闕席裁判及ヒ故障控訴ヲ爲ス可キ得ヘキ裁判又ハ  
 故障控訴ノ期限ヲ經過シタル裁判ニ對シ上告ヲ爲ス可キ得ヌ第四  
 百十條初項ニ豫審又ハ公判ノ言渡云々トアリテ終審ノ文字ナシト

雖モ第二百五十七條第三百四十六條第三百七十一條第四百三條ニ  
 各明文アリ

- 二 第四百十條初項及ヒ第四百十二條ニ定メタル人ノ申立ニ依ルニ非  
サレハ上告ノ案件ト爲ス可カラス蓋シ檢察官其他訴訟關係人ニ非  
 サレハ上告ヲ爲ス可キ得サルハ原則ナリトス然レモ訴訟關係人トハ  
 固ヨリ其訴訟ニ付キ利害ノ關係ヲ有スル者ナルニ因リ最初ヨリ其  
 訴訟ニ關係セサル者ト雖モ不時ニ生シタル事件ノ關係ヨリシテ不  
 利ナル裁判ヲ受ケタル者モ亦訴訟關係人ト看做ス可キヲ以テ上告  
 ヲ爲ス可キ得ヘシ非常上告ハ司法卿モ亦之ヲ爲ス可キ得然レモ司  
 法卿ハ單ニ上告ヲ爲ス可キヲ命スル迄ニシテ直接ニ事ヲ執ルハ  
 大審院檢事長ノ任ナリトス
- 三 第四百十條ニ定メタル原由アル申立ニ非サレハ上告ノ案件ト爲ス  
可カラス但免訴又ハ無罪ノ言渡ニ對シテハ第四百十一條ニ記載シ



タルヨリ以外ノ原由アルヲ要ス

四

第四百十條 檢察官及ヒ被告人ハ豫審又ハ公判ノ言渡ニ

對シ左ノ場合ニ於テ上告ヲ爲スヲ得

- 一 法律ニ背キ忌避ノ申立ヲ認可セサル時
- 二 裁判所ノ構成規則ニ背キタル時
- 三 法律ニ背キ管轄違又ハ管轄ナリトノ言渡若クハ管轄ニ非サル裁判所ニ事件ヲ移スノ言渡アリタル時
- 四 法律ニ於テ無効ノ記載アル規則ニ背キタル時又ハ無効ノ記載ナキ規則ニ背キタルニ因リ異議ノ申立アリタル場合ニ於テ之ヲ認可セサル時
- 五 法律ニ背キ公訴ヲ受理シ又ハ受理セサル時
- 六 法律ニ定メタル場合ニ於テ檢察官ノ意見ヲ聽カサル時

七 裁判所ニ於テ請求ヲ受ケタル事件ニ付キ判決ヲ爲

サス又ハ職權ヲ以テ判決スルヲ得可キ場合ヲ除

クノ外請求ヲ受ケサル事件ニ付キ判決ヲ爲シタル時

八 裁判言渡ヲ公行セス又ハ傍聽ヲ禁スルノ言渡ヲダ

シテ訊問及ヒ辯論ヲ公行セサル時

九 事實及ヒ法律ニ依リ言渡ノ理由ヲ付セス又ハ其理

由ノ齟齬アル時

十 擬律ノ錯誤アル時

十一 越權ノ處分アル時

第四百十一條 免訴又ハ無罪ノ言渡アリタル場合ニ於テ

ハ被告人ノ利益ノ爲メ定メタル規則ニ背キタルヲ又ハ

犯罪ノ場所ニ因リ管轄違アリト雖モ上告ヲ爲スヲ得ス

五



第四百十二條 民事原告人被告人及ヒ民事擔當人ハ私訴

ニ關スル豫審又ハ公判ノ言渡ニ對シ第四百十條ニ定メタル原由ニ付キ上告ヲ爲スヲ得

○破毀ノ原由

一 法律ニ背キ忌避ノ申立ヲ認可セサル時蓋シ本項ハ第二百三十七條第二百七十九條ニ定メタル忌避ノ原由アルニ會議局ニ於テ其申立ヲ棄却シタル場合ヲ謂フ忌避ノ申立ハ之ヲ棄却シタル場合ニ非サレハ上訴ヲ許サ、ルハ第二百四十一條第二百八十一條ニ於テ判然タリ固ヨリ忌避ノ申立ヲ認可シタリト雖モ原告被告ノ權利ヲ滅殺ス可キニ非ス忌避ニ付テハ單ニ申立人ノ利益ヲ保護スルニ在リトス然レモ實際ニ徵スルニ必スシモ然ラス被告人ハ惡意ヲ以テ猥ニ忌避ノ申立ヲ爲シ裁判官ノ如キハ廉耻心ト厭忌心トヲ以テ猥ニ其

申立ヲ認可スルキハ裁判ヲ延滞シ且職員ニ障礙ヲ生スルノ恐アリ故ニ第二百四十一條ニ於テ忌避ノ申立ヲ認可シタル場合ト雖モ上訴ヲ許サ、ルノ理由ナキヲ説明セリ

二 裁判所ノ構成規則ニ背キタル時蓋シ裁判所ノ構成ニ大則小則ノ區別アリ大則トハ第一裁判所ノ公然タルト第二裁判官檢察官書記ノ連班第三重罪事件ニ付テ辯護人ノ出廷是ナリ小則トハ裁判官ノ定員ヲ欠キ又ハ其裁判所ニ於テ職務ヲ行フ可カラサル裁判官檢察官書記連班ヲ爲シ又ハ重罪事件ノ辯護人タル可カラサル者辯護ヲ爲シタル等是ナリ但裁判所構成ノ大則ニ背キタルハ上訴ナシト雖モ當然其裁判ハ無効タル可キナリ

三 法律ニ背キ管轄違又ハ管轄ナリトノ言渡若クハ管轄ニ非サル裁判所ニ事件ヲ移スノ言渡アリタル時蓋シ本項ニ於テハ裁判管轄不當ナリトノ上告ニ付キ三箇ノ原由ヲ定ム第一法律ニ背キタル管轄ニ



非サルノ言渡第二法律ニ背キタル管轄ナリトシテ言渡但管轄ナルヲ管轄ニ非ストシテ管轄ナラサルヲ管轄ナリトスルハ反對ナル不法ニシテ其不法ナルヲ理由トシテ上告ス可キ場合ハ罪質罪種罪人及ヒ免訴ノ言渡アリタル事件ヲ除クノ外罪地ニ属スル管轄ニ限ル共犯罪附帯犯罪俱發犯罪ノ管轄ノ如キハ單ニ上告ノ理由ト爲スヲ得ス第三管轄ニ非サル裁判所ニ事件ヲ移スノ言渡但大審院ヲ除クノ外事件ヲ移スノ言渡即チ送付ノ言渡ヲ爲スハ通常豫審判事及ヒ輕罪裁判所會議局ニシテ罪種ノ管轄ノミニ限ル何トナレハ被告事件管轄違ナルキハ裁判官ニ於テ唯其管轄ニ非サルヲ言渡ス迄ニシテ管轄裁判官ヲ指定スルノ權ナシ單ニ豫審ニ於テハ罪種ニ付キ相當ノ裁判所ニ送付スルノ權アリ輕罪裁判所及ヒ控訴裁判所ニ於テ被告事件ヲ重罪ナリトスル時及ヒ何レノ裁判所ト雖モ公廷ニ於テ重罪ヲ犯シ又ハ禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ偽證ノ罪ヲ犯シタル者アル時ハ豫審判事又ハ會議局ニ送付スルノ言渡ヲ爲スヲアリ此場合ニ於テハ控訴裁判所會議局ニテモ亦相當ノ裁判所ニ送付スルノ言渡ヲ爲スヲアル可シ

四

法律ニ於テ無効ノ記載アル規則ニ背キタル時又ハ無効ノ記載ナキ規則ニ背キタルニ因リ異議ノ申立アリタル場合ニ於テ之ヲ認可セサル時蓋シ法律ニ於テ社會及ヒ被告人ノ爲メ訴訟手續ニ二箇ノ區別ヲ設ケ第一最モ緊要ナル規則ニハ無効ノ制裁ヲ付シ假令其規則ニ背キタルト付キ檢察官其他訴訟關係人ノ異議ナシト雖モ上告ノ理由ト爲スヲ得第二緊要ナラサルニ非スト雖モ裁判官ニ委任シテ危險ヲ招カサル規則ニハ無効ノ制裁ヲ付セス單ニ其規則ニ背キタルト付キ檢察官其他訴訟關係人ヨリ異議ノ申立ヲ爲シ仍ホ其不規則ナル手續ヲ履正セサルキハ上告ノ理由ト爲スヲ得

五

法律ニ背キ公訴ヲ受理シ又ハ受理セサル時蓋シ豫審判事公訴ヲ受



理ス可キ場合ハ第一檢察官ノ起訴アリタル時第二民事原告人ノ起訴アリタル時第三自ラ現行犯ヲ檢證シタル時第四第二百五十五條ノ場合ニ於テ會議局ヨリ委任ヲ受ケタル時第五第二百七十五條ノ場合ニ於テ公廷内ニ於テ犯シタル重罪ニ付キ送付ノ言渡アリタル時第六第二百九十二條ノ場合ニ於テ禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ偽證ノ罪ニ付キ送付ノ言渡アリタル時第七第三百六十條ニ從ヒ其裁判所ヨリ送付ノ言渡アリタル時第八大審院ヨリ送付ノ言渡アリタル時是ナリ公判判事公訴ヲ受理ス可キ場合ハ第三百二十一條第三百四十七條第三百七十二條ニ明文アリ被告事件罪ト爲ラス公訴消滅シタル場合ハ第九條第二百二十四條ニ明文アリ

六 法律ニ定メタル場合ニ於テ檢察官ノ意見ヲ聽カサル時蓋シ本項ニ檢察官ノ意見ヲ聽カサルヲ以テ上告ノ原由ト爲シ被告人ノ意見ヲ聽カサルヲ上告ノ原由ト爲サルハ原被ノ權利偏重偏輕ノ嫌

疑アル可シト雖モ法律ハ刑事ニ付キ決シテ被告ノ不利ナルヲ好マズ必竟檢察官ノ意見ヲ聽クハ裁判監察人タルノ資格ヲ有スルニ依ル故ニ被告人ト雖モ本項ノ原由ニ付キ上告スルヲ得ヘシ

七 裁判所ニ於テ請求ヲ受ケタル事件ニ付キ判決ヲ爲サズ又ハ職權ヲ以テ判決スルヲ得可キ場合ヲ除クノ外請求ヲ受ケサル事件ニ付キ判決ヲ爲シタル時蓋シ本項ニ定メタル二箇ノ條件ハ附帶ノ事件ト雖モ裁判官ハ告ヲ受ケサレハ理セス及ヒ告ヲ受ケタルキハ理セサルヲ得サルノ原則ニ基キタルモノトス但本案事件ニ付テハ第五項ニ明文アリ單ニ公序ニ關スル事件ニ付テハ告ヲ待タズシテ受理スルヲ得之ヲ例外トス刑事ニ付テハ裁判官ノ職權ニ委任スルヲ最モ多シトス

八 裁判言渡ヲ公行セス又ハ傍聽ヲ禁スルノ言渡ナクシテ訊問及ヒ辯論ヲ公行セサル時蓋シ裁判言渡ハ如何ナル場合ト雖モ公行セサル



ヲ得ス訊問辯論ハ被告事件公安又ハ風俗ヲ害スルノ恐アル場合ニ於テ傍聽ヲ禁スルヲアリ本項ハ單ニ公判ノ上告ニ適用ス可キ原由ナリトス第二百六十三條第二百六十四條ヲ參看ス可シ且本條第四法律ニ於テ無効ノ記載アル規則ニ背キタル時トアルニ因リ本項ノ條件ハ重複タルヲ免カレヌ

九 事實及ヒ法律ニ依リ言渡ノ理由ヲ付セス又ハ其理由ノ齟齬アル時蓋シ事實及ヒ法律ニ依リ言渡ノ理由ヲ付セストハ第三百五條ニ於テ説明シタル裁判言渡書式中第四項第五項ヲ脫漏シタルヲ謂フ又其理由ノ齟齬アルトハ事實ニ付テハ故殺ノ模様ニ屬スル證據ノミアルヲ謀殺ノ模様ト認メタルノ類ナリ法律ニ付テハ裁判官謀テ人ヲ殺シタル事實ヲ認メナカラ故殺ノ正條ヲ適用シタルノ類ナリ

十 擬律ノ錯誤アル時蓋シ擬律ノ錯誤トハ必スシモ刑ノ適用ノミニ限ラス法律ニ反シ訴訟關係人ノ負擔ス可キ利害ニ關スル言渡ハ總テ

包含シタルモノトス

十一 越權ノ處分アル時蓋シ越權ト認ム可キ處分ニ付テハ第二百三十四條ニ於テ説明シタルヲ以テ同條ヲ參看ス可シ

○免訴無罪ノ言渡ニ對シ上告ノ原由ト爲ス可カラサル條件

一 被告人ノ利益ノ爲メ定メタル規則ニ背キタルヲ蓋シ免訴無罪ハ被告人ニ利益ナルノ言渡ナルヲ以テ被告人ノ利益ノ爲メ定メタル規則ニ背キタルヲテ原由トシテ其取消ヲ求ムルヲテ許サス故ニ免訴又ハ無罪ノ言渡アリタルキハ被告人ハ言ヲ待タス檢察官ト雖モ被告人ノ利益ノ爲メ上告ヲ爲スヲテ得ス然レモ不當ナル附帶ノ言渡ニ對シ上告スルハ格別ナリトス

二 犯罪ノ場所ニ付テノ管轄違蓋シ被告人ハ法律上固有ノ管轄裁判官



ノ言渡ニノミ服従ス可キ責任アリト雖モ免訴又ハ無罪ノ言渡アリタル場合ハ管轄違ノ裁判官ノ越權ヲ主張スルノ理ナシ檢察官モ亦自カラ管轄違ノ裁判官ニ訴テ爲シ被告人ニ利益ナル言渡アルヲ待テ管轄違ヲ理由トシテ上告スルノ理ナカル可シ

上告ノ權ヲ有スル者

- 一 檢察官但公訴ニ屬スル條件ノミニ限ル
- 二 被告人
- 三 民事原告人但私訴ニ屬スル條件ノミニ限ル
- 四 民事擔當人但私訴ニ屬スル條件ノミニ限ル
- 五 民事引合人即チ贓物追徴ノ爲メ訴訟ニ關係セシメタル者等但其引合ニ係ル條件ノミニ限ル蓋シ民事引合人ノ上告ニ付テハ法律ニ明文ナシト雖モ原被告ノ一部ノ性質ヲ有スル者ナルヲ以テ一部ノ訴權ヲ有ス可キハ言ヲ待タズ

第四百十三條 上告ノ對手人ハ大審院ノ判決アルマテ何時ニテモ附帶ノ上告ヲ爲スヲ得

大審院檢事長モ亦附帶ノ上告ヲ爲スヲ得

○附帶ノ上告

- 一 附帶ノ上告トハ附帶ノ控訴ト均シク上告申立ノ期限經過シタル後上告對手人ヨリ申立人ノ上告ニ附帶シテ申立ル上告ヲ謂フ蓋シ附帶ノ上告ヲ許スハ訴訟關係人ニ平等ノ利益ヲ與フルヲ旨トス舊草案ニハ申立人ニモ亦附帶上告ノ權利ヲ與ヘタリト雖モ之ヲ削除シタルニ因リ附帶ノ上告ハ對手人ニ非サレハ之ヲ爲スヲ得サル可シ然レモ大審院檢事長ハ裁判監察人タルノ職權ニ因リ檢察官ノ上告ニ係ルト否トヲ問ハス附帶上告ノ權ヲ有スルモノトス
- 二 附帶ノ上告ニ付テハ申立ノ期限ヲ定メスト雖モ本案ノ上告判決前



二 非サレハ之ヲ爲スヲ許サス然レモ上告ノ判決ニ對シ哀訴アリタルモ其判決アル迄ハ附帶ノ上告ヲ爲スヲ得ヘシ

○附帶上告ノ手續

一 原裁判所檢察官ヨリ本案ノ上告書類ヲ未タ大審院ニ送致セサル前附帶ノ上告ヲ爲サントスルモ公訴ト私訴トヲ問ハス第四百十六條以下ニ定メタル通常上告ノ手續ニ同シ但檢察官ハ第四百二十條第一項第二項ニ從ヒ書記ヨリ附帶ノ上告書類ヲ受取リタル後本案ノ上告書類ト共ニ之ヲ大審院檢察長ニ送致ス可シ

○二 本案ノ上告書類ヲ大審院ニ送致シタル後ハ原裁判所檢察官ハ附帶ノ上告ヲ爲スヲ得ス若シ附帶上告ノ原由アルヲ發見シタルモ其旨ヲ大審院檢察長ニ通知スルニ止ル若シ被告人ヨリ附帶ノ上告ヲ爲サントスルモ直ニ大審院書記局ニ其申立書ヲ差出ス可シ書記局ニ於テハ第四百十六條第二項ニ從ヒ二十四時内ニ之ヲ檢察

長ニ差出ス可シ其後ノ手續ハ第四百十七條ニ同シ私訴ノ附帶上告ト雖モ直ニ大審院ノ書記局ニ其申立書及ヒ趣意書ヲ差出サル可カラズ但大審院所在ノ地ニ仮住所ヲ定メサル者ハ第二十一條ノ規則ニ從ヒ書類ノ送達ヲ受ケサルモ異議ヲ申立ルヲ得サル可シ

三 大審院ニ於テ上告ノ辯論中附帶ノ上告ヲ爲サントスル者ハ公廷ニ於テ直ニ其申立ヲ爲スヲ得ヘシ其院ニ於テハ訴訟關係人ノ異議ナキモ直ニ附帶上告ノ辯論ヲ爲サシメ又ハ通常ノ規則ニ從ヒ相當ノ期限内ニ趣意書及ヒ答辯書ヲ差出サシメ專任判事ヲシテ報告書ヲ作ラシメ辯論ノ後其裁判ヲ爲スヲ得何レノ場合ニ於テモ本案ノ上告ニ付キ辯論ヲ停止シ又ハ繼續スルコトアル可シ

第四百十四條 上告ノ期限ハ三日ナリトス但豫審ニ付テ

ハ言渡書ノ送達アリタルヨリ起算シ公判ニ付テハ言渡



アリタルヨリ起算ス

○上告申立ノ期限

一 上告ヲ爲ス可キヲ申立ルノ期限ハ終審ノ裁判言渡アリタルヨリ三日間トス若シ其期限内ニ申立ヲ爲サ、ルキハ上告ノ權ヲ失フ蓋シ上告申立書ヲ差出スハ單ニ上告ス可キヲ對手人ニ通知シ且裁判執行ノ猶豫ヲ得ルノ處置タルニ過キサルニ因リ大審院ニ於テ上告ヲ受理スルハ訴訟關係人ヨリ差出シタル上告申立書ニ依ラヌシテ上告申立人ヨリ差出シタル上告趣意書ニ依ル故ニ訴訟關係人三日内ニ上告申立書ヲ差出シタリト雖モ五日内ニ上告趣意書ヲ差出サ、ル時又ハ上告趣意書ヲ差出サ、ル前申立人ヨリ上告願下ヲ爲シタル時ハ原裁判所ニ於テ直ニ相當ノ處分ヲ爲スヲ得但其期限計算等ニ付キ異議アルキハ格別ナリトス

二

豫審ノ判決ハ必ス言渡書ヲ以テ之ヲ爲シ決審ノ判決ハ必ス公廷ニ於テ之ヲ言渡スヲ原則トスルニ因リ上告申立ノ期限ヲ計算スルニハ第十八條ニ從ヒ初日ヲ除去シ豫審ニ付テハ言渡書ノ送達ノ翌日公判ニ付テハ言渡ノ翌日ヲ以テ第一日トス即チ本條ノ但書アル所ニ以テ然レモ言渡書ヲ送達ス可キ判決ニ付テハ其送達ヨリ起算シ口達ヲ以テ言渡ス可キ判決ニ付テハ其言渡アリタルヨリ起算スルヲ上訴期限ヲ計算スルノ通則トスルキハ網羅シテ盡セリト謂フ可シ何トナレハ公判ト雖モ第三百十三條ニ定メタル會議局ノ判決ニ對シ上告セントスルキハ其期限ハ言渡書ノ送達アリタルヨリ起算セサルヲ得サル可シ

第四百十五條 豫審又ハ公判ノ言渡ニ對シ上告アリタル時ハ勾留保釋責付釋放及ヒ放免ノ言渡ヲ除クノ外其執



行ヲ停止ス

○上告中原裁判所ノ言渡ノ執行停止

- 一 豫審中故障ノ判決ハ直ニ之ヲ執行ス然レモ後ニ上告アリタルキハ本案ノ言渡ニ付キ執行ヲ停止ス豫審終結ノ言渡ニ對スル故障ノ判決ハ上告アリタルキハ必ス其執行ヲ停止ス
- 二 公判中附帶事件ノ判決ハ直ニ之ヲ執行ス然レモ後ニ上訴アリタルキハ本案ノ裁判言渡ニ付キ執行ヲ停止ス但管轄違公訴受理ス可カラサルノ言渡民事擔當人其訴訟ニ關係スルニ付テノ異議ノ判決及ヒ忌避ノ申立ヲ棄却スルノ言渡ニ對シ上訴アリタルキハ直ニ執行ヲ停止ス本案ノ裁判言渡ニ對スル上告ハ總テ其執行ヲ停止ス

○未決中被告人ノ身體ヲ拘束スルト否トノ言渡ニ付テハ

上告ノ有無ニ拘ハラヌ直ニ之ヲ執行スルノ理由

- 一 身體ヲ拘束スルノ言渡ハ直ニ之ヲ執行セサレハ其言渡ヲ爲スノ效用ナカル可シ何トナレハ未決中勾留ヲ要スルハ總テ被告人ノ逃亡ヲ防クニ外ナラス故ニ其言渡ノ確定ヲ待ツニ暇アラヌ本條ニ勾留トアルハ收監等ヲ包含シタルモノトス
- 二 身體ノ拘束ヲ解除スルノ言渡ハ豫審ト公判トヲ問ハス始審ノ言渡ニ付テハ上訴期限内及ヒ上訴中其執行ヲ停止ス然レモ終審ノ言渡ニ付テハ本條ノ明文ニ依リ其執行ヲ停止セス蓋シ既ニ終審ニ於テ保釋責付釋放又ハ放免ノ言渡アリタルニ仍ホ身體ヲ拘束スルハ頗ル苛酷ノ處分タルヲ免カレヌ

第四百十六條 上告ヲ爲サントスル者ハ其申立書ヲ原裁判所ノ書記局ニ差出ス可シ

判所ノ書記局ニ差出ス可シ

上告ノ申立書ハ其申立アリタルヨリ二十四時内ニ書記



ヨリ之ヲ對手人ニ送達ス可シ

○上告申立書

- 一 上告申立書ヲ差出スハ對手人ニ上告ヲ爲ス可キヲ通知シ裁判執行ヲ停止スルニ必要ナル手續ナリトス然レモ申立書ヲ差出シタル而已ニテハ大審院ニ於テ其上告ヲ受理シタルモノト爲ス可カラス何トナレハ上告ノ案件ハ第四百十條ニ定メタル不當ノ理由ニ屬スルニ因リ控訴ノ如ク申立ノミヲ以テ直ニ裁判ヲ爲スヲ能ハサルナリ故ニ第一申立書ハ大審院宛ニテ差出スニ及ハス第二趣意書ヲ差出サ、ル間ハ何時ニテモ原裁判所ニ其取消ヲ申立ルヲ得第三期限内ニ趣意書ヲ差出サ、ル時ハ直ニ裁判執行ヲ爲スヲ得但其期限ニ付キ異議アルキハ格別ナリトス
- 二 上告申立書ハ申立人ヨリ期限内ニ原裁判所ノ書記局ニ之ヲ差出シ

書記ハ之ヲ受取タルヨリ二十四時内ニ對手人ニ之ヲ送達ス二十四時ノ期限ハ之ヲ超過スルモ書記ノ過失ヲ責ムル迄ニシテ上告事件ニ影響ヲ及ホスヲナシ且假令申立書ノ送達ナキモ趣意書ノ送達ヲ受ケタルキハ對手人ヨリ故障ヲ述フルヲ得ス

第四百十七條 上告申立人ハ其申立ヲ爲シタルヨリ五日

内ニ趣意書ヲ原裁判所ノ書記局ニ差出ス可シ

書記ハ上告趣意書ヲ受取リタルヨリ二十四時内ニ之ヲ

對手人ニ送達ス可シ

第四百十八條 對手人ハ上告趣意書ヲ受取リタルヨリ五

日内ニ答辯書ヲ原裁判所ノ書記局ニ差出ス可シ書記ハ

其答辯書ヲ受取リタルヨリ二十四時内ニ之ヲ上告申立

人ニ送達ス可シ



○上告ノ趣意書及ヒ答辯書

- 一 上告趣意書ニハ破毀ヲ求ムルノ原由等ヲ記載シ且大審院宛ニテ之ヲ作ラサル可カラズ何トナレハ大審院ニ於テハ申立人ヨリ原裁判所ノ書記局ニ差出シタル趣意書ニ依テ上告ヲ受理ス可キモノトス
- 二 上告答辯書ニハ趣意書ニ記載シタル破毀ノ原由ニ付キ上告ノ當否ヲ證明スル迄ニシテ原裁判ニ對シ他ノ原由ニ付キ爭端ヲ闡クヲ得ス但別ニ附帶上告ノ路アリ
- 三 上告ノ趣意書及ヒ答辯書ヲ差出ス可キ期限ニ付テハ共ニ五日ノ猶豫アリ蓋シ此期限ハ嚴確ナル者ニシテ若シ之ヲ經過シタルキハ申立人ハ上告ノ權ヲ失ヒ對手人ハ答辯ノ權ヲ失フ可シ但對手人ハ大審院ノ公判ニ代言人ヲ差出スノ權ヲ失フニ非スト雖モ本院專任判事ノ報告ニ自己ノ意見ヲ登用セシムルヲ得ス
- 四 書記ヨリ趣意書ヲ對手人ニ送達シ答辯書ヲ申立人ニ送達スル期限

ハ二十四時間ナリ假令送達ヲ遅延スルモ懲戒ノ責アルニ過キスト雖モ若シ趣意書ノ送達ヲ怠リタルキハ大審院ノ判決アルマテ對手人ハ答辯書ヲ差出スノ權ヲ失フコトナカル可シ

第四百十九條 檢察官ヨリ差出ス可キ上告趣意書又ハ答

辯書ハ二通ヲ作り一通ヲ大審院ニ差出シ一通ヲ對手人ニ送達ス可シ

私訴ノ裁判言渡ニ對シ訴訟關係人ヨリ差出ス可キ上告趣意書又ハ答辯書ニ付テモ亦同シ

○書記局ニ差出ス可キ上告ノ趣意書及ヒ答辯書ノ定數

- 一 公訴ニ付キ檢察官ヨリ差出ス可キ趣意書又ハ答辯書ハ二通ニシテ
- 一通ハ上告書類ト共ニ大審院ニ送致ス可キモノニシテ一通ハ對手人即チ被告人ニ送達シ之ヲ返納セシムルニ及ハス若シ同一ノ事件



ニシテ同一ノ理由ニ付キ被告人數名ニ對シ又ハ被告人數名ヨリ上告アリタルキハ一名毎ニ趣意書又ハ答辯書一通ヲ増加ス可シ同一ノ事件ト雖モ各別ナル理由ニ付キ被告人數名ニ對シ又ハ被告人數名ヨリ各別ニ上告アリタルキハ一名毎ニ趣意書又ハ答辯書二通ヲ作ラサル可カラス

二 公訴ニ付キ被告人ヨリ差出ス可キ趣意書又ハ答辯書ハ如何ナル場合ト雖モ一通ニテ足レリトス蓋シ其一通ヲ書記局ヨリ檢察官ニ送致シ檢察官ハ第四百二十條第二項ニ從ヒ上告書類ト共ニ大審院ニ之ヲ送致ス

三 私訴ニ付テハ上告ノ申立人又ハ對手人數名アリト雖モ趣意書又ハ答辯書ハ對手人又ハ申立人ニ送達ス可キモノ一通及ヒ大審院ニ差出ス可キモノ一通ニテ足レリトス但各自各別ナル要償ニ付テハ此限ニ在ラス

第四百二十條 書記ハ前數條ニ定メタル期限經過シタル

後速ニ訴訟書類及ヒ上告書類ヲ其裁判所ノ檢察官ニ差出ス可シ

檢察官ハ其書類ヲ五日內ニ大審院檢察長ニ差出シ且意見アル時ハ之ヲ添フ可シ

檢察長ハ上告事件ヲ刑事局ノ簿冊ニ登記ス可キヲ法院長ニ請求ス可シ

○上告事件ヲ大審院ニ差出スノ手續

一 本條第一項ニ書記ハ前數條ニ定メタル期限經過シタル後云々トアリ故ニ對手人期限內ニ答辯書ヲ差出サスト雖モ其儘ニテ一切ノ書類ヲ其裁判所ノ檢察官ニ差出サ、ル可カラス但本項ニ訴訟書類トアルハ原裁判ニ關スル書類ニシテ上告書類トアルハ上告アリタル



ニ因リ關係人ヨリ差出シタル書類ヲ云フ

二 本條第二項ニ檢察官ハ五日內ニ一切ノ書類ヲ大審院檢事長宛ニテ發付ス可キコトヲ定ム此期限ハ意見書ヲ差出ス爲メノ猶豫ヲ與ヘタルモノトス假令此期限ヲ經過スルモ職務上懲戒ノ責アルノミコト上告事件ニ影響ヲ及ホスコナカル可シ又檢察官ノ意見書ハ大審院檢事長ノ參考ニ供スル迄ニシテ上告ノ判決ニ採用ス可キモノニ非ス

三 大審院檢事長ハ上告ニ關スル書類ヲ受取リタル後其判決アラソコトヲ求ム即チ本條第三項ニ檢事長ハ上告事件ヲ刑事局ノ簿冊ニ登記ス可キコトヲ院長ニ請求ス可シトアリ其簿冊タルヤ第二百六十二條第一項ニ基キ公判ニ付ス可キ事件ヲ順次登記ス可キモノトス

第四百二十一條 上告申立人及ヒ對手人ハ代言人ヲ差出スコトヲ得

重罪ノ刑ノ言渡ヲ受ケタル者上告ヲ爲シ又ハ檢察官ヨリ重罪ノ刑ニ該ル可キ者トシテ上告ヲ爲シタル場合ニ於テ刑ノ言渡ヲ受ケタル者自ラ代言人ヲ選任セサル時ハ院長ノ職權ヲ以テ其院所屬ノ代言人中ヨリ之ヲ選任ス可シ

○上告ニ付テノ代言人

一 始審終審ノ公判ニ付テハ被告人自ラ辯論ヲ爲シ及ヒ第二百六十六條ニ從ヒ辯護人ヲ用フルコトヲ得然レモ上告ニ付テハ民事原告人民事擔當人等ハ言ヲ待タズ被告人ト雖モ自ラ出廷シテ辯論ヲ爲スコトヲ得ス必ス代言人ヲ差出サ、ル可カラス何トナレハ大審院ノ判決ハ法律上ノ疑議ニ屬シ理論頗ル高尙ニ涉ルニ因リ専門ノ科業ヲ脩メタル者ニ非サレハ徒ニ贅辯ヲ費シ時日ヲ消スルノ恐アリ然ルニ



一 疑問アリ即チ第二百六十六條第二項但書ニ依リ代言人ニ非スト雖モ裁判所ノ允許ヲ得テ辯護人ト爲リタル者ハ其事件ノ上告代言人ト爲ルコト得否是ナリ蓋シ此疑問ヲ決スルニハ大審院ニ於テ代言ノ職務ハ必ス其所屬代官人之ヲ行フ可キカ又ハ通常代官人ニテモ之ヲ行フ可キカヲ定ム可シ若シ所屬代官人ニ非サルハ大審院ニ於テ代言ノ職務ヲ行フコト能ハサルキハ代官人ニ非サル辯護人ヲ以テ上告ノ代言ヲ爲スコト得ス又通常代官人ニテモ之ヲ行フコト得ヘキキハ既ニ裁判所ノ允許ヲ得タル辯護人ハ其職務ヲ繼續シテ上告ノ代言ヲ爲スコト得ヘシ本條第二項ノ法文ヲ推考スルキハ院長ノ職權ヲ以テ撰任ス可キ場合ノ外大審院所屬ノ代官人ニ非サルモ上告ノ代官人タルコト得ヘキナリ

二 上告ノ裁判ハ公行ス故ニ申立人及ヒ對手人ハ必ス代官人ヲ差出サ、ルキハ對審ノ利益ヲ失フ可シ然レモ上告ノ案件ハ法律上ノ疑義

ニ屬シ趣意書アリ答辯書アリ且專任判事ノ報告アルヲ以テ出廷シテ辯論ヲ爲サ、ルモ其判決ニ影響ヲ及ホスコト甚タ稀ナル可シ故ニ本條第一項ニ代官人ヲ差出スコト得トアリ假令之ヲ差出サ、ルモ第四百二十六條ニ從ヒ其儘ニテ判決シ對審ト均ク哀訴期限即チ裁判言渡ヨリ三日ノ後直ニ執行ノ手續ヲ爲シ別段故障ヲ申立ルコトヲ許サス

第四百二十二條 院長ハ刑事局判事中ニテ專任判事一名

ヲ命ス可シ

專任判事ハ一切ノ書類ヲ檢閲シ其報告書ヲ作ル可シ但自己ノ意見ヲ付ス可カラス

○專任判事ノ報告

一 大審院檢事長ヨリ上告事件ヲ刑事局ノ簿冊ニ登記ス可キコトノ請求



アリタル後院長ハ報告書ヲ作ラシムル爲メ刑事局判事中ニテ專任判事一名ヲ命ス但專任判事ハ裁判長ヲ除キ順次其他ノ判事ニ事件ヲ配付シテ之ヲ命ス可シト雖モ事件ノ模様ニテハ順次ニ拘ハラス特別ニ之ヲ命スルコトアル可シ

二 專任判事上告書類ヲ檢閲シ報告書ヲ作ルノ方法ハ第一上告ノ案件破毀ヲ求ムルノ理由及ヒ證據第二答辯ノ旨趣及ヒ證據第三專任判事取調ノ主旨及ヒ法律規則ノ參照ヲ詳記ス可シ但自ラ判決ヲ爲ス如キ方法ヲ以テ報告書ヲ作ルルハ本條第二項但書ニ抵觸スルヲ免カレズ然レモ云々ノ法律規則又ハ判決例ニ依ルルハ云々タリ云々ノ事實又ハ理由ニ基クキハ云々タリト記載スル如キハ最モ報告ヲ明了ニスルノ方法ニシテ自己ノ意見ヲ付スルト看做ス可キモノニ非ス

第四百二十三條 上告申立人及ヒ對手人ハ專任判事ノ報

告書ヲ差出スマテハ大審院書記局ヲ經由シテ其趣意ヲ擴張ス可キ辯明書ヲ差出スコトヲ得  
專任判事報告書ヲ差出タル後辯明書ヲ差出シタル時ハ之ヲ其報告書ニ添フ可シ

○上告申立人及ヒ對手人其趣意ヲ擴張ス可キ辯明書

一 辯明書ハ上告又ハ答辯ノ趣意ヲ貫徹セシムル爲メ理由及ヒ證據ヲ增加ス可キモノニシテ更ニ他ノ條件ニ論及シテ附帶上告ト同一ノ性質タラシム可カラス故ニ辯明書ニ付テハ附帶上告ノ如ク別段對手人ノ答辯書ヲ要セス

二 辯明書ハ原裁判所ノ書記局ヲ經由スルヲ要セス直ニ大審院ニ出頭シ若クハ郵便ヲ以テ同院書記局ニ差出スコトヲ得

三 專任判事報告書ヲ作り之ヲ院長ニ差出サル、前辯明書ヲ差出シタ



ルキハ之ヲ調査シテ報告書ヲ作ル可シ若シ報告書ヲ院長ニ差出シタル後辯明書ヲ差出シタルキハ判決ノ参照トシテ之ヲ報告書ニ添置シ可シ但公廷ニ於テ大審院檢事長ハ原裁判所檢察官ノ差出シタル辯明書ノ旨趣ヲ陳述シ代言人ハ訴訟關係人ノ依頼ヲ受ケ其差出シタル辯明書ノ旨趣ヲ陳述シ互ニ辯論ヲ爲スヲ得

第四百二十四條 書記ハ開廷ヨリ三日前ニ開廷ノ日時ヲ

上告申立人及ヒ對手人ノ代言人ニ報知ス可シ

○開廷ノ手續

一 專任判事報告書ヲ作リタル上ニテ之ヲ院長ニ差出シ裁判件名簿ニ登記ス蓋シ大審院ニ於テ訴訟事件ヲ裁判スルハ刑事事件名簿ニ登記シタル順序ニ依ラスシテ裁判件名簿ニ登記シタル順序ニ從フ何トナレハ專任判事ヲ命スルハ刑事事件名簿ノ順序ニ從フト雖モ各專任

判事ヨリ報告書ヲ差出スニ遲速アリ故ニ之ヲ差出シタル順序ヲ以テ裁判件名簿ニ登記シ之ヲ裁判ニ付スルノ順序トス

二 開定ノ日時ハ刑事局長之ヲ定ム蓋シ該局事件ノ繁閑及ヒ陪席判事ノ交替等ヲ料理シ開廷ノ日時ヲ定ムルハ裁判案件ニ非スシテ裁判事務ニ屬スルヲ以テ該局長ノ職權タルハ當然ナル可シ

三 書記ハ刑事局長ノ命ヲ受ケ開廷ヨリ三日前即チ呼出狀ヲ送達シタル日ト出廷ノ日トヲ除キ三日ノ猶豫ヲ以テ上告ノ申立人及ヒ對手人ノ代言人ニ開廷ノ日時ヲ通知ス蓋シ是等ノ代言人ハ第二十一條ノ規則ニ從ヒ豫メ其住所ヲ届置カサル可カラス大審院檢事長ニモ亦開廷スルニ付キ三日前簡單ナル通知ヲ爲サル可カラス

第四百二十五條 開廷ノ日ニハ公廷ニ於テ專任判事其報

告書ヲ朗讀ス可シ



檢事長及ヒ代言人ハ各其趣意ヲ辯明ス可シ

私訴ノ上告ニ付テハ檢事長最終ニ其意見ヲ陳述ス可シ

第四百二十六條 上告申立人又ハ對手人ヨリ代言人ヲ差

出サ、ル時ハ其儘ニテ判決ヲ爲ス可シ

○上告ノ裁判手續

一 上告ノ裁判手續ハ甚々簡單ナリ第一公廷ノ班列既ニ定マリタル後  
 裁判長ハ云々事件ニ付キ公判ニ取掛ル可キヲ言渡シ且代言人出  
 廷シタルキハ其氏名等ヲ訊問スルヲ第二專任判事報告書ヲ朗讀ス  
 ルヲ但專任判事列席スト雖モ事故アルキハ其旨ヲ申立テ書記ヲシ  
 テ朗讀セシムルヲ得ヘシ又專任判事ハ報告書ヲ明了ナラシムル  
 爲メ仍ホ其旨趣ヲ陳述スルヲ得ヘシ第三檢察官ノ上告ニ付テハ  
 檢事長先ツ其趣意ヲ陳述シ次ニ被告代言人其趣旨ヲ陳述ス可シ被

告人ノ上告ニ付テハ其代言人先ツ其趣意ヲ陳述シ次ニ檢事長其趣  
 意ヲ陳述ス可シ但互ニ復答スルヲ得第四私訴ノ上告ニ付テハ申  
 立人先ツ其趣意ヲ陳述シ次ニ對手人其趣意ヲ陳述ス可シ但互ニ復  
 答スルヲ得然ル後檢事長其意見ヲ陳述ス可シ第五裁判言渡  
 二 公訴ノ上告ニ付キ代言人ヲ差出サ、ルキハ專任判事報告書ヲ朗讀  
 シタル後檢事長ノミ其趣意ヲ陳述シ私訴ノ上告ニ付キ代言人ヲ差  
 出サ、ル者アルキハ出廷シタル一方ノ代言人其趣意ヲ陳述シ然ル  
 後檢事長其意見ヲ陳述ス可シ但上告ノ裁判ニ代言人ヲ差出サ、ル  
 者アリト雖モ闕席ノ儘ニテ裁判言渡ヲ爲シ總テ對審ノ効果ト異ナ  
 ルヲナカル可シ

第四百二十七條 大審院ニ於テ上告ノ理由ナシトスル時

○ハ之ヲ棄却スルノ言渡ヲ爲ス可シ



○上告ノ本案ニ付キ棄却ノ言渡ヲ爲ス可キ場合

- 一 故障又ハ控訴ニ係ル事件ニシテ其判決ヲ爲シタル會議局又ハ控訴裁判所ニ申立ヲ爲サ、ル事項ニ付キ上告ヲ爲シタル時但會議局又ハ控訴裁判所ノ職權ヲ以テ判決シタル事項ニ付テハ此限ニ在ラス
- 二 公序ニ關スル事項ヲ除クノ外原裁判所ニ於テ申立テサル事實ニ付キ上告シテ始テ之ヲ申立テタル時
- 三 裁判官ノ判定ニ委任シタル事實ノ有無輕重ニ付キ上告ヲ爲シタル時但新聞條例ニ違犯シタル事件等ノ如ク書類ニ依テ事實ヲ判定ス可キ犯罪ニ付テハ此限ニ在ラス
- 四 訴訟關係人自己ノ不利益ナル事項ヲ原由トシテ上告ヲ爲シタル時
- 五 裁判ノ性質ヲ有セス及ヒ終審ノ裁判ヲ經サル事件ニ付キ上告ヲ爲シタル時

六 第四百十條ニ定メタル原由ヲ缺キタル時

○上告ノ本案ニ關セサル事項ニ付キ直ニ棄却ノ言渡ヲ爲

ス可キ場合

- 一 上告申立書及ヒ趣意書ヲ差出ス可キ期限ヲ經過シタル時
- 二 原裁判所ノ訴訟ニ關係セサル者ヨリ上告ヲ爲シタル時
- 三 闕席裁判ヲ受ケタル者故障ヲ爲サスシテ直ニ上告ヲ爲シタル時
- 四 禁錮以上ノ刑ノ言渡ヲ受ケ逃亡シタル者第三百十條ノ規則ニ背キ現ニ捕ニ就カスシテ上告ヲ爲シタル時
- 五 上告中立人ヨリ上告ノ願下ヲ爲シタル時但本件ハ佛國大審院ニ於テハ判決ヲ爲サス單ニ上告件名簿ノ登記ヲ塗抹スルニ過キス然レモ本邦ニ於テハ棄却ノ言渡アルヲ至當トス何トナレハ刑法第五十二條ニ犯人自ラ上訴シテ其上訴正當ナルモハ前判宣告ノ日ヨリ刑



期ヲ起算シ若シ不當ナルキハ後判宣告ノ日ヨリ之ヲ起算ス可キ  
ヲ定ム故ニ大審院ニ於テ判決ヲ爲サルキハ後判宣告ノ日ヨリ起  
算スルヲ得ス隨テ定役ニ服ス可キ刑ノ言渡ヲ受ケタル者ハ盡ク  
一應上告シテ願下ヲ爲サル者ナカル可シ且私訴ノ上告關係人ハ  
大審院ニ於テ直ニ上告ニ付テノ裁判費用償却ヲ受クルヲ得ス更  
ニ民事裁判所ニ出訴セサルヲ得サル等却テ實際ノ不便ヲ免カレサ  
ル可シ

○上告事件ニ付キ判決ヲ爲サル場合

- 一 被告人死去シタル時
- 二 大赦ニ依リ免罪セラレタル時

○上告ヲ受理セサル場合ノ手續

- 一 上告ノ本案ニ付キ棄却ノ言渡ヲ爲ス可キ場合ハ通常ノ手續ニ從ヒ

公廷ニ於テ專任判事ノ報告檢察官及ヒ上告關係人ノ陳述ヲ聽キ判  
決セサル可カラス

- 二 上告ノ本案ニ關セサル事項ニ付キ直ニ棄却ノ言渡ヲ爲ス可キ場合  
モ亦通常ノ手續ニ從ヒ判決ス可シト雖モ專任判事ハ其棄却ス可キ  
事項ニ付キ報告ヲ爲ス迄ニシテ上告ノ本案ニ付キ報告ヲ爲スニ及  
ハス

- 三 上告事件ニ付キ判決ヲ爲サル場合ハ刑事事件名簿ノ登記ヲ塗抹シ  
上告書類ヲ原裁判所ニ却付ス

第四百二十八條 大審院ニ於テ豫審又ハ公判ノ言渡ニ對

スル上告ニ付キ破毀ノ原由アリトスル時ハ其言渡ノ全  
部ヲ破毀シ其事件ヲ他ノ裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲ス可  
シ但後ノ數條ニ記載シタル場合ハ此限ニ在ラス



第四百二十九條 擬律ノ錯誤若クハ法律ニ背キ公訴ヲ受理シ又ハ受理セサルヲニ因リ原裁判言渡ヲ破毀シタル時ハ其事件ヲ移スヲナク大審院ニ於テ直チニ裁判言渡ヲ爲ス可シ

第四百三十條 豫審又ハ公判ノ手續規則ニ背キタルヲアリト雖モ其後ノ手續ニ利害ヲ及ホサル時ハ其事件ヲ他ノ裁判所ニ移スヲナク止メ其手續ヲ破毀ス可シ

第四百三十一條 豫審又ハ公判ノ言渡ノ幾分ニ對シ上告アリタル場合ニ於テ他ノ部分ニ關係アラサル時ハ大審院ニ於テ其上告ニ係ル部分ヲ破毀シ法律ニ從ヒ直チニ相當ノ裁判言渡ヲ爲シ又ハ其事件ヲ他ノ裁判所ニ移ス

可シ

○破毀ニ係ル事件ノ處分

- 一 破毀ノ原由ハ固ヨリ法律上ノ瑕疵ニ屬スト雖モ破毀ノ結果ハ或ハ法律上ノ貼斷アリ或ハ法律及ヒ事實上ノ貼斷アリ或ハ貼斷ヲ要セスシテ破毀スルニ止ルヲアリ
- 二 破毀ニ係ル事件ハ單ニ法律上ノ貼斷ノミヨ止ルキハ大審院ニ於テ直ニ裁判シ若シ法律及ヒ事實上ノ貼斷ヲ要スルキハ他ノ裁判所ニ移シテ更ニ裁判セシム然レモ管轄違及ヒ公訴受理ス可カラサルノ申立等豫判ス可キ條件ニ付キ原裁判所ノ言渡ヲ破毀シタルキハ大審院ニ於テ直ニ裁判言渡ヲ爲シ本案ノ事件ハ仍ホ原裁判所ヲシテ之ヲ裁判セシム

○破毀ノ判決



一 大審院ニ於テ原裁判言渡ノ全部ヲ破毀シ直ニ裁判言渡ヲ爲ス可キ  
 場合ハ第一事實ノ錯誤ナクシテ擬律ノ錯誤アリタル時但擬律ノ錯  
 誤トハ單ニ刑ノ適用ニ止マラス賠償ス可カラサル損害ヲ賠償セシ  
 ヲ負擔ス可カラサル訴訟費用ヲ負擔セシムル等總テ之ヲ包含ス第  
 二法律ニ背キ公訴ヲ受理シ又ハ受理セサル時但確定裁判期滿免除  
 等アリタル事件ニ付キ公訴ヲ受理シタル場合ハ豫判ノ言渡ニ對シ  
 直ニ上告スルコトアリ又ハ本案ノ言渡ニ對シ上告スルコトアリ然レモ  
 公訴ヲ受理セサル場合ハ豫判ノ言渡ニ對シ上告スルコトアル而已或  
 ル論者ハ法律ニ背キ公訴ヲ受理セサルコトニ付キ大審院ニ於テ直ニ  
 裁判言渡ヲ爲ス可キ場合ナキコトヲ苦ムハ豫判ノ言渡ニ對シ上告ス  
 可キ場合ニ注意セサルニ依ルナリ第二百七十七條第二百七十八條  
 ナ參看ス可シ蓋シ公訴ヲ受理シ又ハ受理ス可カラサル豫判ノ言渡  
 ハ破毀ニ係ルト雖モ大審院ニ於テ直ニ公訴ヲ受理シ又ハ受理ス可

カラサルコトヲ判決シ他ノ裁判所ニ移スコトナク本案ノ事件ハ仍ホ原  
 裁判所ニ於テ之ヲ裁判ス可キナリ

二 大審院ニ於テ原裁判言渡ノ幾部ヲ破毀シ直ニ裁判言渡ヲ爲ス可キ  
 場合ハ原裁判言渡ノ全部ニ關係ヲ有セサル幾部ノ擬律ノ錯誤ニ外  
 ナラス譬ハ監視ニ付ス可キヲ付セス沒收ス物件ヲ沒收セサル等ノ  
 如シ第四百三十一條ニ豫審又ハ公判ノ幾分ニ對シ上告アリタル場  
 合云々トアリ假令言渡ノ全部ニ對シ上告アリト雖モ全部ニ關係ヲ  
 有セサル幾部ノ瑕瑾ニ過キサルモ亦同條ニ依ラサル可カラス

三 大審院ニ於テ審理ノ手續ノミヲ破毀ス可キ場合ハ其手續タル法律  
 ニ背戻スルモ事實ニ利害ヲ及ホサル條件是ナリ第四百三十條ニ  
 豫審又ハ公判ノ手續規則ニ背キタルコトアリト雖モ其後ノ手續ニ利  
 害ヲ及ホサル時云々トアリ假令其後ノ手續ニ利害ヲ及ホスト雖  
 モ其後ノ手續モ亦事實ニ利害ヲ及ホサル條件ナルモハ固ヨリ同



條ニ依ラサル可カラズ

四 大審院ニ於テ原裁判言渡ヲ破毀シ其事件ヲ他ノ裁判所ニ移ス可キ  
場合ハ原裁判言渡ノ全部ヲ破毀シタルト幾部ヲ破毀シタルトニ拘  
ハラズ破毀ノ原由タル事實ニ利害ヲ及ホス可キ條件是ナリ第四百  
二十八條ニハ原裁判言渡ノ全部ヲ破毀シテ其事件ヲ他ノ裁判所ニ  
移ス可キ場合ヲ掲ケ第四百三十一條末段ニハ原裁判言渡ノ幾部ヲ  
破毀シテ其事件ヲ他ノ裁判所ニ移ス可キ場合ヲ掲ク故ニ第四百二  
十八條但書ハ第四百三十一條末段ニ少シク矛盾セリ

第四百三十二條 大審院ニ於テ原裁判言渡ヲ破毀シ直チ

ニ裁判言渡ヲ爲シタル時ハ原裁判所又ハ他ノ裁判所ヲ  
シテ其執行ヲ爲サシム可シ

○大審院ノ裁判言渡ノ執行

一 本條ノ規則ハ第六編裁判執行ノ章ニ掲載スルヲ允當ナリトス且本  
條ニハ大審院ニ於テ直ニ裁判言渡ヲ爲シタル場合ノミニシテ其他  
ノ場合ヲ掲載セサルハ頗ル不完全ナル規則タルヲ免カレズ抑モ大  
審院ニ於テ原裁判ノ全部ヲ破毀シタルト幾部ヲ破毀シタルトナ問  
ハス直ニ裁判言渡ヲ爲シタル場合ハ本院檢事長ヨリ裁判執行ノ爲  
メ判文ヲ原裁判所檢察官ニ送致シ檢察官ハ其判決ノ條件ヲ被告人  
ニ通知シ其執行ヲ爲ス可キモノトス本條ニ原裁判所又ハ他ノ裁判  
所ヲシテ其執行ヲ爲サシム可シトアリ別段判文ニ執行ヲ爲ス可キ  
裁判所ヲ指示シタル場合ノ外通常執行ヲ爲スハ總テ原裁判所ナリ  
トス然レモ罰金以下ノ刑ノ言渡ヲ受ケ他管ニ在ル者其他原裁判所  
ヲシテ執行セシメ難キ情實アル者ハ別段他ノ裁判所ヲ指定シテ其  
執行ヲ爲サシム此場合ニ於テハ大審院檢事長ヨリ判文ヲ原裁判所  
檢察官ニ送致シ其檢察官ハ判文及ヒ被告人現ニ勾留ヲ受ケタルキ



- ハ共ニ執行ヲ爲ス可キ裁判所檢察官ニ送致ス可シ
- 二 大審院ニ於テ事實ニ利害ヲ及ホサル審理ノ手續ノミヲ破毀シタル場合ハ原裁判所ニ於テ原裁判言渡ヲ執行ス
- 三 大審院ニ於テ原裁判言渡ヲ破毀シ其事件ヲ他ノ裁判所ニ移シタル場合ハ同院檢察長ヨリ執行ノ爲メ判文ヲ原裁判所檢察官ニ送致シ檢察官ハ其判決ノ條件ヲ被告人ニ通知シ判文其他訴訟書類及ヒ被告人現ニ勾留ヲ受ケタルキハ共ニ大審院ヨリ指定シタル裁判所檢察官ニ送致シ其裁判所ニ於テハ通常ノ手續ニ從ヒ更ニ裁判ヲ爲ス可シ

第四百三十三條 大審院ニ於テ破毀シタル事件ヲ他ノ裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲ス可キ時ハ原裁判所ニ接近シタル同等ノ裁判所ヲ定示ス可シ其單ニ私訴ニ係ル事件ハ

之ヲ民事裁判所ニ移ス可シ

○破毀ノ事件ヲ移ス可キ裁判所

- 一 原裁判所ニ接近シタル裁判所但此規則ヲ設ケタルハ固ヨリ被告人ヲ護送シ書類ヲ往復スル爲メ及ヒ訴訟關係人ノ爲メ便益ヲ要スルニ在リ然レモ常ニ最近ノ裁判所ノミニ事件ヲ送付スルハ或ハ弊害ナシトゼス法律ハ單ニ故ナシ原裁判所ヨリ遠隔ナル裁判所ニ送付スルヲ拒ムニ過キス
- 二 原裁判所ト同等ナル裁判所但上告ハ終審ノ裁判ニ非サレハ之ヲ爲スヲ得ス又終審ノ裁判ヲ破毀スルモ之ヲ始審裁判所ニ移ス可キ理ナシ故ニ必ス終審ノ裁判所即チ同等ナル裁判所ヲ定示ス可キヲ定メタルモノトス
- 三 私訴ノ上告ノミヲ破毀シタルキハ民事裁判所但公訴附帶ノ私訴ハ



假令單ニ私訴ノミニ係ル上訴ト雖モ刑事裁判所ニ於テ之ヲ受理ス可キモノトス然レモ大審院ニ於テ私訴ノミニ付キ上告アリタル事件又ハ公訴私訴共ニ上告アリタリト雖モ私訴ニ係ル事件ノミヲ破毀シタルキハ訴訟ノ利益ノ爲メ民事裁判所ニ移シ總テ通常民事ノ規則ニ從ヒ裁判セシム

第四百三十四條 法律ニ係ル大審院ノ判決ハ確定ノ者トス

大審院ヨリ送付ヲ受ケタル裁判所ノ裁判言渡ニ對シテハ通常ノ規則ニ從ヒ更ニ上告ヲ爲スヲ得

○大審院判決ノ効力

一 大審院ノ判決ハ其効力タル強大ニシテ言渡アリタルヨリ直ニ確定シタル者トス哀訴ノ如キハ再審ノ訴ト均ク確定裁判ノ効力ニ反スル一方法タルニ過キス論者或ハ哀訴ノ期限間執行ヲ停止スルヲ以

テ直ニ確定セサルモノトスルハ誤解ナリ畢竟裁判ノ確定スルト否トハ執行ヲ停止スルト否トヲ以テ決ス可カラス第三百九條裁判言渡ノ執行ヲ停止ス可キ場合ノ説明ヲ參看ス可シ原草案第五百七十七條ニ贗造又ハ錯誤アル書類ニ因リ判決ヲ爲シタル時ヲモ哀訴ノ原由トシ其期限ハ何時ニテモ書類ノ贗造又ハ錯誤アルヲ認定シタルヨリ三日ナルヲ定ム此場合ニ於テ大審院ノ判決ハ幾年ヲ經過スルモ確定セスト謂フヲ得ヘケンヤ

二 本條ニ法律ニ係ル大審院ノ判決云々トアリ然則大審院ニ於テ判決シタル確定ノ効力ハ事實ニ及ハス故ニ同院ニ於テ既ニ判決シタル條件ト雖モ送付ヲ受ケタル裁判所ニ於テ審理上事實ニ變更アルキハ必スシモ大審院ノ判決ニ從フヲ要セス然レモ事實ニ變更ナキキハ決シテ大審院ノ判決ニ反スルヲ得ス

三 法律ニ係ル大審院ノ判決ハ確定ノ効力アルヲ以テ其判決ノ點ニ付



テハ決シテ再ヒ上告スルコトヲ得ス故ニ本條第二項ニ送付ヲ受ケタル裁判所ノ裁判言渡ニ對シ更ニ上告スルヲ得ヘキコトヲ定ムト雖モ大審院ノ判決ニ反セサル點ニ限ルモノトス

第四百三十五條

法律ニ於テ罰セサル所爲ニ對シ刑ヲ言渡シ又ハ相當ノ刑ヨリ重キ刑ヲ言渡シタル場合ニ於テ定期内ニ上訴スル者ナクシテ其裁判言渡確定シタル時ハ大審院檢事長ヨリ司法卿ノ命ニ因リ又ハ職權ヲ以テ何時ニテモ非常上告ヲ爲スコトヲ得非常上告アリタル時ハ原裁判言渡ヲ破毀シ大審院ニ於テ直チニ裁判言渡ヲ爲ス可シ

○非常上告

一 非常上告ハ再審ノ訴ト立法ノ旨趣相似タルモノトス再審ノ訴ハ事

實ノ錯誤ヲ改正シ非常上告ハ法律ノ錯誤ヲ改正スルノ方法ニシテ共ニ被告人ニ利益ヲ得セシム可キ場合ニ限リ故ニ本邦非常上告ハ佛國法律保護ノ上告ト少シク其旨趣ヲ異ニス佛國法律保護ノ上告ハ大審院設立ノ要件タル法律統一ノ旨趣ニノミ出テタル者ナルヲ以テ總テ不法ノ裁判ヲ破毀スルヲ目的トシ決シテ被告人ノ利害ニ關係スルコトナシ

二 非常上告ヲ爲スノ權ハ單ニ大審院檢事長ニ屬ス司法卿ハ非常上告ヲ爲ス可キコトヲ命スルノ權アリ原訴訟關係人ハ裁判確定ノ後ナルヲ以テ對手人ト爲ルノ權ヲモ有セス故ニ非常上告ハ訴訟ニ非スシテ請願ノ性質ニ近シ大審院ニ於テハ單ニ上告中立人即チ檢事長ノ意見ニ依リ判決スルニ過キス

三 非常上告ヲ爲ス可キ原由ハ罪トナラサル事件ナルニ刑ヲ言渡シ又ハ罪トナル可キ事件ト雖モ過當ノ刑ヲ言渡シタルコト是ナリ故ニ沒



収ス可カラサルヲ没収シタル如キ場合ハ非常上告ヲ爲スヲ得ト  
雖モ私訴及ヒ裁判費用ノ如キハ訴訟法ニ於テ特定ノ規則アルニ非  
サレハ非常上告ニ付キ破毀ノ利益ヲ受クルヲナカル可シ

四 非常上告ヲ爲スハ通常上告ヲ爲サ、ル事件ニ限ル本條ニ定期内ニ  
上訴スル者ナク云々トアリ然レモ假令故障控訴アリタリモ上告ア  
ラサル事件ニ付テハ非常上告ヲ爲スヲ得ヘシ本條第二項ハ不備  
ニシテ且不用ニ屬ス何トナレハ非常上告ト雖モ必スモ破毀ス可  
キニ非ス總テ通常上告ニ付テノ規則ニ從ハサル可カラス

五 本條ニ明文ナシト雖モ非常上告ハ刑ノ消滅シタルト否ト被告人ノ  
生存スルト否トニ拘ハラズ之ヲ爲スヲ得ヘシ何トナレハ立法ノ  
旨趣タル再審ノ訴ト均シキヲ以テ之ヲ推知ス可シ既ニ事實ノ錯誤  
ニ付キ名譽回復ノ爲メ再審ノ訴ヲ爲スヲ得ヘキモ法律ノ錯誤  
ニ付テモ亦名譽回復ノ爲メ非常上告ヲ爲スヲ得ヘカラサルノ理

アラシヤ況ヤ罰金及ヒ沒收ノ如キハ名譽ノ回復ノミナラス既ニ消  
滅シタル刑ト雖モ亦之ヲ回復スルヲ得ヘシ單リ再審ノ訴ハ本人  
其他ノ者ヨリ之ヲ爲スヲ許シ非常上告ハ大審院檢察長ニノミ之  
ヲ爲スヲ許シタルハ事實ノ錯誤ニ付テハ上告スルノ路ナシト雖  
モ法律ノ錯誤ニ付テハ上告ノ路アルニ之ニ依ラサルモ獨ホ非常上  
告ヲ爲スヲ許スモハ裁判確定ノ効力ナキニ至ルヲ以テナリ

第四百三十六條 左ノ場合ニ於テハ大審院ノ裁判言渡ニ

- 對シ檢察長其他訴訟關係人ヨリ其院ニ哀訴スルヲ得
- 一大審院ニ於テ前數條ニ定メタル式ヲ履行セサル時
- 二訴訟關係人ヨリ申立タル條件ニ付キ判決ヲ爲サ、ル  
時
- 三同一ノ裁判言渡ニ付キ二箇ノ條件齟齬シタル時



○哀訴

- 一 哀訴トハ確定ノ効力ヲ有スル大審院ノ裁判言渡ニ對シ他ニ據ル可キノ路ナキヲ以テ歎訴スルノ意義ナリトス哀訴ノ法ハ佛國訴訟法敬慎ノ願ニ基キ之ヲ設定シタル者ト雖モ敬慎ノ願ニ比スレハ其場合最モ狹隘ナリ
- 二 大審院ノ裁判言渡ハ對審ナルト闕席ナルトヲ問ハス其効力ノ差異アラサルヲ以テ代言人ヲ差出サ、ル訴訟關係人ハ哀訴ノ權ヲ拋棄シタルト均シク之ヲ爲スト得サル可シ

○哀訴ノ原由

- 一 大審院ニ於テ前數條ニ定メタル式ヲ履行セサル時蓋シ前數條ノ文義ハ狹ク之ヲ解ス可カラヌ大審院裁判ノ法式ハ法文ニ詳載セスト雖モ自ラ一定スル所アリ大審院ニ於テハ公道正理ニ基キ相當ノ法

式ヲ履行シタルヤ否ヲ判決セサル可カラス

- 二 訴訟關係人ヨリ申立タル條件ニ付キ判決ヲ爲サ、ル時蓋シ辯論中訴訟關係人ヨリ請求又ハ異議ノ申立等ヲ爲シタルコトニ付キ判決ヲ爲サ、ル場合ノ如キハ第一項ニ包含セリ本項ハ全ク上告ヲ爲シタル條件中判決ヲ缺キタル者アル場合ニ係ルモノトス
- 三 同一ノ裁判言渡ニ付キ二箇ノ條件齟齬シタル時蓋シ本項ハ既ニ判決シタル二箇ノ點ニ於テ同一ノ事理ニ歸ス可キヲ前ニ可トシテ後ニ否トスル等ノ判決ヲ爲シ同一ノ言渡中前後矛盾シタル場合ヲ謂フ

第四百三十七條 哀訴ヲ爲サントスル者ハ裁判言渡アリ

タルヨリ三日内ニ書記局ニ其申立ヲ爲ス可シ書記ハ申立書ヲ受取リタルヨリ三日内ニ之ヲ對手人ニ送達シ對



手人ハ同一ノ期限内ニ其答辯書ヲ差出ス可シ  
大審院ニ於テハ通常上告ノ規則ニ從ヒ哀訴ノ判決ヲ爲  
ス可シ

第四百三十八條 大審院ノ裁判言渡ハ其言渡アリタルヨ  
リ三日間又哀訴アリタル時ハ其判決アルマテ執行ヲ停  
止ス

○哀訴ニ付テノ手續

一 哀訴ハ闕席シタル者ニ付テハ之ヲ許サ、ルニ依リ必ス言渡アリタ  
ルヨリ三日内ニ大審院書記局ニ其申立ヲ爲ス可キモノトス但哀訴  
ノ申立書ハ通常上告ト同シカラス必ス其申立書中ニ哀訴ノ原由ヲ  
明記セサル可カラス然ラサレハ別段趣意書ヲ差出サ、ルニ因リ對  
手人ハ答辯書ヲ差出スヲ得サル可シ

二 書記ハ三日内ニ申立書ヲ對手人ニ送達セサル可カラス然レモ該期  
限ハ書記職務上ノ程規ニ過キサルヲ以テ哀訴ノ効ノ有無ニ關係ス  
ルヲナカル可シ

三 對手人ハ申立書ノ送達ヲ受ケタルヨリ三日内ニ答辯書ヲ大審院ノ  
書記局ニ差出ス可キモノトス然レモ假令之ヲ差出サ、ルモ公廷ニ  
於テ對審スルノ權ヲ失フニ非ス唯々專任判事ノ報告ニ自己ノ趣意  
ヲ貫徹セシムルヲ能ハサル而已

四 大審院ノ判決ハ確定ノモノト雖モ哀訴ノ期限間及ヒ哀訴ノ判決ア  
ル間ハ其執行ヲ停止ス可キヲ定ム但哀訴ノ判決ニ付テハ更ニ哀  
訴スルヲ許サ、ル可シ故ニ哀訴ノ判決ニ付テハ執行ヲ停止スルニ  
及ハス

第二章 再審ノ訴



○再審ノ訴ヲ爲ス可キ案件

- 一 事實ノ錯誤ニシテ第四百三十九條ニ定メタル確證アルコト
- 二 重罪輕罪ノ刑ノ言渡ヲ受ケタルコト
- 三 刑ノ言渡確定シタルコト
- 四 刑ノ言渡ヲ受ケタル者ノ利益ト爲ル可キコト
- 五 第四百四十條ニ記載シタル者ノ申立アリタルコト

第四百三十九條 再審ノ訴ハ左ノ場合ニ於テ重罪輕罪ノ

刑ノ言渡ニ對シ被告人ノ利益ノ爲メ之ヲ爲スコト得但  
裁判確定ノ後ニ非サレハ之ヲ爲スコトヲ得ス

- 一人ヲ殺シタル罪ニ付キ刑ノ言渡アリタル後其言渡ノ  
日ニ當リ殺サレタリト認メラレシ者現ニ生存シ又ハ  
犯罪前既ニ死去シタルノ確證アリタル時

二 同一ノ事件ニ付キ共犯ニ非スシテ別ニ刑ノ言渡ヲ受  
ケタル者アリタル時

三 犯罪アル以前ニ作りタル公正ノ証書ヲ以テ當時其場  
所ニ在ラサルコトヲ證明シタル時

四 被告人ヲ陷害シタル罪ニ因リ刑ノ言渡ヲ受ケタル者  
アリタル時

五 公正ノ證書ヲ以テ訴訟書類ニ偽造又ハ錯誤アルコトヲ  
證明シタル時

○再審ノ原由

- 一 本條第一ニ殺人罪ニ付キ刑ノ言渡ヲ受ケタル場合ニ於テ再審ノ訴  
ヲ爲ス可キ二箇ノ原由ヲ定ム第一被殺人ト認メラレタル者現ニ生  
存シタル時第二被殺人ト認メラレタル者犯罪以前既ニ死去シタル



ノ確證アル時蓋シ第一ノ理由ニ付テハ現ニ生存シタル者果シテ被  
殺人ト認メラレタル者ナルヤ否ヲ推究スルニ過キサルヲ以テ其確  
證ヲ得ルヲ最モ容易ナリ第二ノ理由ニ付テハ殺人罪ヲ犯シタリト  
認メラレタル時日以前ニ被殺人ト認メラレタル者既ニ死去シタル  
ヲ推究ス可キヲ以テ其確證ヲ得ルヲ頗ル容易ナラスト本項ニ  
犯罪ノ後犯罪ノ理由ニ據ラスシテ死去シタル時ノ一理由ヲ脱却セ  
リ何トナレハ犯罪前死去シタルヲ以テ被殺ニ非サルノ確證トス  
ルキハ犯罪後他ノ理由ニテ死去シタルヲモ被殺ニ非サルノ確證  
トセル可カラサルニ似タリ法文ノ不備ナルヲ覺フ

二 本條第二ニ定メタル再審ノ理由ハ三箇ノ條件ヲ具備スルヲ要ス第  
一事件ノ同一ナルヲ但事件同一ナレハ一方ハ必ス無罪者タルノ確  
證タル可シ第二共犯ニ非サルヲ但共犯ナルキハ二名以上同一ノ罪  
ヲ犯スヲ得ヘシ第三別ニ刑ノ言渡ヲ受ケタル者アルヲ但他ニ刑

ノ言渡ヲ受ケタル者アルキハ前受刑者多クハ無罪タルノ確證タル  
可シ然レモ受刑ノ前後ニ拘ハラス裁判言渡前他ニ受刑者アルヲ  
知ラサルキハ後ノ受刑者ニ付テモ再審ノ訴ヲ爲スヲ得ヘシ

三 本條第三ニ定メタル再審ノ理由ハ其理由ト爲ル可キ事實ニ二箇ノ  
要件アリ第一犯罪ノ時ニ於テ其場所ニ在ラサルヲ但場所トハ必ス  
シモ犯罪ノ場所ニ非ス場合ニ隨テ廣狹アリ到底犯罪ニ關係スル  
ヲ得ヘキ地ヲ云フ第二當時其場所ニ在ルニ非サレハ事件ニ關係ス  
ルヲ得ヘカラサル犯狀ナルヲ故ニ遠方ニ在リト雖モ共謀シテ犯サ  
シメタル事件ノ如キハ再審ノ訴ヲ許サ、ルハ言ヲ待タサル可シ又  
本項ノ理由ヲ證明スルニ二箇ノ要件アリ第一公正ノ證書ヲ以テ證  
明ス可キヲ第二犯罪以前ニ作りタル證書ナルヲ但公正ノ證書ヲ要  
スルハ詐偽ヲ防クニ在リ犯罪以前ニ作りタル證書ヲ要スルハ少シ  
ク切迫ナル制限ナリト雖モ頗ル正確ヲ旨トスルニ在リ



四 本條第四ニ定メタル再審ノ原由ハ頗ル簡單ニシテ且確實ナルニ因リ毫モ疑義アルコトナシ本條ニ被告人トアルハ既ニ刑ノ言渡ヲ受ケタル者ナリト雖モ總テ再審ノ利益ヲ得ヘキ者ヲ指ス

五 本條第五ニ定メタル再審ノ原由ハ其原由トナル可キ事實ニ二箇ノ要件アリ第一訴訟書類ニ偽證又ハ誤證アルコト第二裁判官其偽證又ハ誤證ヲ以テ判決ノ基礎ト爲シタルコト是ナリ第二ノ條件ニ付テハ法文少シク不備ナリト雖モ決シテ第一ノ條件ノミチ以テ再審ノ原由ト爲スモ其効ナカル可シ本項ノ原由ニ付テハ公正ノ證書ヲ要スト雖モ疑難ニ涉ルコトアル可キチ以テ其證明ノ方法最モ注意セサル可カラス

第四百四十條

再審ノ訴ヲ爲スコトヲ得可キ者左ノ如シ

一 刑ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ノ檢察官

二 刑ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ヲ管轄スル控訴裁判所ノ  
檢察長

三 大審院檢察長但司法卿ノ命ニ因リ又ハ職權ヲ以テ其  
訴ヲ爲ス可シ

四 刑ノ言渡ヲ受ケタル者

五 刑ノ言渡ヲ受ケタル者死去シタル時ハ其親屬

○再審ノ訴權ヲ有スル者

- 一 管轄裁判所及ヒ其上等ノ裁判所檢察官即チ本條第一第二第三ニ記載シタル者はナリ蓋シ裁判監察人タル本分ノ職務ナリトス
- 二 冤枉ニ罹リタル者即チ本條第四第五ニ記載シタル者はナリ但第五ニ記載シタル者ハ代權人ニシテ第四ニ記載シタル者ノ死去シタル場合ニ限ル



第四百四十一條 再審ノ訴ハ刑ノ消滅シタルニ拘ハラズ

何時ニテモ之ヲ爲スヲ得

○再審ノ訴ハ刑ノ消滅ニ拘ハラサルノ理由

一 再審ノ訴ハ或ル場合ヲ除クノ外罪ノ消滅ヲ目的トス故ニ刑ノ消滅ハ再審ノ訴ヲ許サ、ルノ原由タル可カラズ

二 再審ノ訴ハ公訴私訴ノ責任ヲ免カル、ト名譽ヲ回復スルトニ在リ故ニ刑ノ消滅ノヨニテハ完全ナル結果ト謂フ可カラズ

第四百四十二條 再審ノ訴ヲ爲サントスル者ハ其趣意書

ニ原裁判言渡書ノ謄本及ヒ証憑書類ヲ添ヘ之ヲ原裁判所ノ書記局ニ差出ス可シ

原裁判所ノ檢察官ハ其書類ニ意見書ヲ添ヘ之ヲ大審院  
檢事長ニ差出ス可シ

原裁判所ノ檢察官及ヒ控訴裁判所檢事長自ラ再審ノ訴  
ヲ爲サントスル時ハ前項ノ手續ニ從ヒ其書類ヲ差出ス  
可シ

○再審ノ訴ヲ爲スノ手續

一 第四百四十條第四第五ニ記載シタル者ヨリ再審ノ訴ヲ爲サントス  
ルルハ原裁判所即チ刑ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ノ書記局ニ再審ノ  
訴ヲ爲スニ付テノ趣意書原裁判言渡書ノ謄本及ヒ再審ノ訴ヲ爲ス  
可キ証憑書類ヲ差出ス可シ書記ハ之ヲ其裁判所ノ檢察官ニ送致シ  
檢察官ハ意見書ト共ニ之ヲ大審院ノ檢事長ニ送致ス

二 第四百四十條第一第二ニ記載シタル者再審ノ訴ヲ爲サントスルル  
ハ其趣意書原裁判言渡書ノ謄本及ヒ証憑書類ヲ直ニ大審院檢事長  
ニ送致ス何レノ場合ニ於テモ檢察官ハ原裁判ニ關スル訴訟書類ヲ



添へサル可カラス

第四百四十三條 大審院ニ於テハ檢事長ノ請求ニ因リ速ニ專任判事一名ヲシテ其取調ヲ爲シ報告書ヲ差出サシム可シ

第四百四十四條 大審院ニ於テハ他ノ事件ヲ閣キ刑事局判事全員會議局ニ集會シ專任判事ノ報告書及ヒ檢事長ノ意見書ニ依リ判決ヲ爲ス可シ

○大審院ニ於テ再審ノ訴ニ付テノ裁判手續

- 一 大審院檢事長ヨリ再審ノ訴訟事件ヲ刑事局ノ簿冊ニ登記ス可キヲ  
 ナ院長ニ請求シ院長ハ刑事局判事中ニテ專任判事一名ヲ命ジ專任  
 判事報告書ヲ作ルノ手續ハ總テ上告ニ付キ定メタル規則ニ全シ
- 二 專任判事報告書ヲ差出シタル時ハ裁判件名簿ノ順序ニ拘ハラヌ即

時ニ刑事局判事全員會議局ニ集會シ書類裁判ナルヲ以テ專任判事ノ報告書檢事長ノ意見書等ニ依リ判決ス但檢事長ノ意見書ヲ差出スハ刑事事件名簿ニ登記ヲ求ムルノ際ニ非スシテ專任判事報告書ヲ差出シタル後訴訟書類ト共ニ之ヲ檢事長ニ送致シ檢事長ハ意見書ヲ添テ之ヲ還付シ然ル後刑事局全員會議ニ付スルヲ正當ノ手續ナリトス

第四百四十五條 大審院ニ於テ再審ノ原由アルヲ認メタル時ハ原裁判言渡ヲ破毀シ公訴及ヒ私訴ニ付キ再審ヲ爲ス可キヲ言渡シ其事件ヲ原裁判所ト同等ナル他ノ裁判所ニ移ス可シ  
 其送付ヲ受ケタル裁判所ニ於テハ通常ノ規則ニ從ヒ裁判ヲ爲ス可シ



第四百四十六條 死者ノ親屬ヨリ再審ノ訴ヲ爲シタル場合ニ於テ大審院ニテ再審ノ原由アルコトヲ認メタル時ハ其事件ヲ他ノ裁判所ニ移スコトナク原裁判言渡ヲ破毀ス可シ

○再審ノ訴ニ付テノ言渡

一 大審院ニ於テハ再審ノ訴ト雖モ上告ト均ク事實ノ審理ニ干預セサルヲ以テ之ヲ判決スルハ單ニ再審ヲ爲ス可キ事件ナリヤ否ヲ判決スルニ止ルモノトス故ニ再審ノ原由ナキコトヲ認メタルキハ棄却ノ言渡ヲ爲シ若シ其原由アルコトヲ認メタルキハ原裁判言渡ヲ破毀シ其事件ヲ原裁判所ト同等ナル他ノ裁判所ニ移シテ公訴及ヒ附帶ノ私訴ニ付キ再審ヲ爲ス可キコトヲ言渡シ再審ヲ爲ス可キ裁判所ニ於テハ破毀ニ係ル上告事件ノ送付ヲ受ケタル場合ト均ク通常ノ規則

ニ從ヒ更ニ相當ノ言渡ヲ爲ス可キモノトス

二 被告人生存セサル場合ニ於テハ大審院ニテ再審ノ原由アルコトヲ認ムルモ原裁判言渡ヲ破毀スルニ止ル然レモ私訴ニ付テハ原裁判言渡無効ニ屬スルヲ以テ被告人ノ相続人ハ通常民事ノ規則ニ從ヒ取戻ノ訴ヲ爲スコトヲ得ヘシ第四百四十六條ニ死者ノ親屬ヨリ再審ノ訴ヲ爲シタル場合云々トアルハ再審ノ訴アリタル後被告人死去シタル場合ヲモ包含シタルモノトス

第四百四十七條 再審ノ裁判ニ因リ無罪ノ言渡アリタル

時又ハ前條ノ場合ニ於テ破毀ノ言渡アリタル時ハ其者ノ名譽ヲ復スル爲メ其言渡書ヲ揭示公告ス可シ

○再審ノ訴ニ付テノ言渡書ノ揭示公告

一 大審院ヨリ再審事件ノ送付ヲ受ケタル裁判所ニ於テ再審ヲ爲シ無



罪ノ言渡アリタルキハ其裁判所ニ於テ名譽回復ノ揭示公告ヲ爲ス可キ場所ヲ定示ス可シ但揭示公告ノ場所ハ第一被告人住所ノ地ノ裁判所第二原裁判言渡ヲ爲シタル裁判所第三犯罪アリトセラレタル地ノ裁判所第四再審ヲ爲シタル裁判所等ニシテ其方法ハ裁判所ノ門前ニ再審ノ裁判言渡書ヲ貼付スルニ止ルモノトス

二 大審院ニ於テ死者ニ係ル再審ノ訴ニ付キ原裁判言渡ヲ破毀シタルキハ全院ニテ名譽回復ノ揭示公告ヲ爲ス可キ場所ヲ定示ス可シ再審ノ原由單ニ刑ノ減輕ニ止ル可キ者ナルキハ揭示公告ノ限ニ在ラズ

### 第三章 裁判管轄ヲ定ムルノ訴

#### 第四百四十八條 通常裁判所ト特別裁判所トヲ問ハス管轄ニ非サルノ言渡ヲ爲シ其言渡確定シタル時又忌避ノ

由若クハ非常ノ事變ニ因リ訴訟事件ヲ管理スルヲ能ハサル時ハ檢察官其他訴訟關係人ヨリ裁判管轄ヲ定ムルノ訴ヲ爲スヲ得

大審院檢事長ハ司法卿ノ命ニ因リ又ハ職權ヲ以テ其訴ヲ爲スヲ得

#### ○裁判管轄ヲ定ムルノ訴ヲ爲ス可キ場合

一 管轄ス可キ裁判所ナキ場合蓋シ第一通常裁判所ニ於テ管轄違ノ言渡ヲ爲シ其言渡確定シ他ニ管轄ス可キ裁判所ナキ時第二通常裁判所ニ於テハ特別裁判所即チ軍事裁判所等ノ管轄ニ屬ス可キモノト認メ管轄違ノ言渡ヲ爲シ特別裁判所ニ於テハ通常裁判所ノ管轄ニ屬ス可キモノト認メ管轄違ノ言渡ノ前後ヲ論セ

ス共ニ確定シタル時但裁判管轄ヲ定ムル大審院ノ權限ハ通常裁判



所ノミナラス特別裁判所ニ及フモノトス第三外國ニ在テ犯シタル  
罪日本國ノ法律ニ依リ處斷ス可キ者ニシテ最終住所分明ナラサル  
被告人ニ對シ闕席裁判ヲ爲ス可キ時即チ第四十五條第二項ニ明文  
アリ

二 管轄裁判所アリト雖モ訴訟ヲ管理スルコト能ハサル場合蓋シ第一忌  
避ノ原由管轄裁判官全員ニ係リ訴訟ヲ管理スルコト能ハサル時但管  
轄裁判所ニ於テ忌避ノ申立ヲ認可シタル場合ニ限ル若シ忌避ノ申  
立ヲ棄却シタルキハ通常上訴ノ路ニ依ラサル可カラズ大審院ニ於  
テ上告ノ判決ニ依リ忌避ノ原由アリト認メタルキハ裁判管轄ヲ定  
ムルノ訴ニ付テノ判決ト均ク其事件ヲ管理ス可キ裁判所ヲ定示セ  
サル可カラズ第二非常ノ事變ニ因リ訴訟ヲ管理スルコト能ハサル時  
但非常ノ事變トハ戰爭其他豫定ス可カラサル場合アル可シ

○裁判管轄ヲ定ムルノ訴權ヲ有スル者

- 一 訴訟關係人但被告人ノ如キハ上訴ヲ受理ス可キ裁判所アラサル場  
合ニ非サレハ裁判管轄ヲ定ムルノ訴ヲ爲スコトナカル可シ
- 二 管轄裁判所ノ檢察官
- 三 大審院檢事長但自己ノ職權ヲ以テ裁判管轄ヲ定ムルノ訴ヲ爲シ又  
ハ司法卿ノ命ニ因リ之ヲ爲スコトアリ

第四百四十九條 裁判管轄ヲ定ムルノ訴ヲ爲サントスル  
者ハ其趣意書ニ訴訟書類ヲ添ヘ之ヲ大審院ノ書記局ニ  
差出ス可シ

第四百五十條 大審院ニ於テハ刑事局判事五名以上會議  
局ニ集會シ專任判事ノ報告書及ヒ檢事長ノ意見書ニ依  
リ裁判管轄ヲ定ムルノ訴ヲ判決シ其事件ヲ管理ス可キ  
裁判所ヲ定示ス可シ



○裁判管轄ヲ定ムル訴訟及ヒ判決ノ手續

- 一 裁判管轄ヲ定ムルノ訴ニ付テハ原裁判所ナク且未タ對手人ヲ關係セシムルコトヲ得サルヲ以テ趣意書ト共ニ訴訟書類ヲ直ニ大審院書記局ニ差出ス可キコトヲ定ム
- 二 裁判管轄ヲ定ムルノ訴ヲ判決スル手續ハ再審ノ訴ニ付キ定ムル所ト異ナルコトナシ第四百四十三條第四百四十四條ノ説明ヲ參看ス可シ唯判事全員ノ集會ト他ノ事件ヲ閣クコトヲ要セサル而已

第四章 公安又ハ嫌疑ノ爲メ裁判管轄ヲ移スノ訴

第四百五十一條 犯罪ノ性質被告人ノ身分員數地方ノ民心其他重大ナル事情ニ因リ裁判ニ對シ紛擾又ハ危險ヲ生スルノ恐アル時ハ公安ノ爲メ其事件ヲ全等ナル他ノ裁判所ニ移スコトヲ得

第四百五十二條 公安ノ爲メ裁判管轄ヲ移スノ訴ハ司法

卿ノ命ニ因リ大審院檢事長ヨリ其院ニ之ヲ爲ス可シ

○公安ノ爲メ裁判管轄ヲ移スノ訴

- 一 公安ノ爲メ裁判管轄ヲ移スノ訴ハ其裁判ニ因リ紛擾又ハ危險ヲ生ス可キコトヲ原由トス而テ其紛擾又ハ危險ヲ生ス可キ條件ハ必スシモ豫定ス可カラス然レモ法文ニハ第一犯罪ノ性質即チ國事犯ノ如キ第二被告人ノ身分即チ舊領主華族其他名望アル者ノ如キ第三被告人ノ員數即チ兇徒聚衆ノ如キ第四地方ノ民心即チ住民ノ激動又ハ概歎ニ至ル可キ事件ノ如キ是ナリ其他重大ナル事情アルモノハ皆之ヲ包含ス可キコトヲ定ム唯行政上些末ノ事情ヲ以テ猥ニ管轄ヲ動カス可カラサル而已
- 二 公安ノ爲メ裁判管轄ヲ移スノ訴ハ政務ニ屬スルヲ以テ其訴權ハ單



リ司法卿ニ属ス然レモ之ヲ實行スルハ大審院ノ檢事長ナリトス  
三 公安ノ爲メ裁判管轄ヲ移スノ訴ハ起訴ノ前後ヲ論セス何時ニテモ  
之ヲ爲シ且訴訟關係人ノ答辨書ヲ要セス唯檢事長ヨリ趣意書其他  
参考書類ヲ差出スニ過キス

第四百五十三條 大審院ニ於テハ會議局ニテ訴訟關係人

ノ申立ヲ聽クコトナク速ニ前條ノ訴ヲ判決ス可シ

○公安ノ爲メ裁判管轄ヲ移スノ訴ニ付テノ判決

一 公安ノ爲メ裁判管轄ヲ移スノ訴ニ付テハ事狀簡單ナルヲ以テ專任  
判事ノ報告ヲ要セス又檢事長ハ趣意書ヲ差出ス可キヲ以テ別ニ其  
意見書ヲ要セス又口述ハ勿論書面ニテモ訴訟關係人ノ申立ヲ聽ク  
ヲ要セス直ニ判決ス可キモノトス

二 本條ニ會議局ニテ判決ス可キコトヲ定ムト雖モ判事何名タルコトヲ明

載セス然レモ五名以上ナルモハ第七十八條ノ構成ニ背カサルヲ以  
テ瑕瑾ナカル可シ又本條ニ訴訟關係人ノ申立ヲ聽クコトナク云々ト  
アリ會議局ノ判決ナルヲ以テ直接ニ其中立ヲ聽カサルハ勿論ナリ  
唯通常關係人ハ公安ノ爲メ裁判管轄ヲ移スノ訴ニ關係スルヲ得サ  
ルコト示シタルモノトス又本條ニ速ニ前條ノ訴ヲ判決ス可シトア  
リ別段他ノ事件ヲ閣ク可キコトヲ明記セスト雖モ其判決ハ最モ急速  
ヲ要ス可キ者ナルヲ以テ訴アリタルモハ即時ニ判決ス可キノ文意  
ナリトス

第四百五十四條 被告人ノ身分地方ノ民心又ハ訴訟ノ模

様ニ因リ裁判ノ公平ヲ維持スルコト能ハサルノ恐アル時  
ハ嫌疑ノ爲メ其事件ヲ全等ナル他ノ裁判所ニ移スコトヲ  
得



第四百五十五條 嫌疑ノ爲メ裁判管轄ヲ移スノ訴ハ管轄  
 裁判所ノ檢察官其他訴訟關係人ヨリ之ヲ爲スヲ得  
 民事原告人嫌疑アル裁判所ニ私訴ヲ爲シ又被告人其裁  
 判所ニ於テ異議ノ申立ナクシテ本案ニ付キ辯論ヲ爲シ  
 タル時ハ前項ノ訴ヲ爲スヲ得ス

○嫌疑ノ爲メ裁判管轄ヲ移スノ訴

- 一 嫌疑ノ爲メ裁判管轄ヲ移スノ訴ハ裁判官他ノ障礙ノ爲メ裁判ノ公  
 平ヲ維持スル能ハサルコトヲ理由トス第一被告人ノ身分即チ華族豪  
 族ノ如キ第二地方ノ民心即チ衆人ノ意想ノ如キ第三訴訟ノ模様即  
 チ其勝敗ノ影響裁判所ノ利害ニ關スルコトノ如キ是ナリ
- 二 嫌疑ノ爲メ裁判管轄ヲ移スノ訴權ヲ有スル者ハ通常ノ訴訟ト均ク  
 檢察官其他訴訟關係人ナリトス然レモ檢察官ヲ除クノ外訴訟關係

人ハ本案ノ辯論前ニ非サレハ裁判管轄ヲ移スノ訴ヲ爲スヲ得ス  
 第四百五十五條第二項ハ民事原告人嫌疑アル裁判所ニ私訴ヲ爲シ  
 本案ニ付キ辯論ヲ爲シタル時ハ前項ノ訴ヲ爲スヲ得ス又被告人  
 嫌疑アル裁判所ニ於テ異議ノ申立ナクシテ本案ニ付キ辯論ヲ爲シ  
 タル時ハ前項ノ訴ヲ爲スヲ得スト解セサル可カラス蓋シ民事原  
 告人嫌疑アル裁判所ニ私訴ヲ爲シタル而已ニテ前項ノ訴ヲ爲ス  
 ヲ得ストスルキハ私訴ヲ爲サ、レハ訴訟關係人ト爲テサルヲ以テ  
 民事原告人ハ控訴ノ對手人ト爲リタル場合ヲ除クノ外裁判管轄ヲ  
 移スノ訴ヲ爲ス可キ場合ナカル可シ又本項ニ被告人其裁判所ニ於  
 テ異議ノ申立ナクシテ云々トアリ異議ノ申立ナクシテノ九字ハ別  
 段有用ニ非ス何トナレハ異議ノ申立トハ嫌疑ノ爲メ裁判管轄ヲ移  
 スノ訴ヲ爲ス可キコトノ申立ナル可シト雖モ管轄ヲ移スノ訴ヲ爲ス  
 ハ必スシモ審理中ニ限ラサルヲ以テ異議ノ申立ヲ爲サル場合ナ



キニ非ス畢竟如何ナル場合ト雖モ本案ニ付キ辨論ヲ爲シタル以後ハ訴權ヲ失ハシムルノ法意タルニ過キス又本項ニ民事擔當人ヲ脱シタリト雖モ被告人ヨリ超過シタル訴權ヲ有セサルハ言ヲ待タサル可シ

第四百五十六條 嫌疑ノ爲メ裁判管轄ヲ移スノ訴ヲ爲ス

ニハ其趣意書二通ヲ原裁判所ノ書記局ニ差出ス可シ  
書記ハ速ニ一通ヲ對手人ニ送達シ對手人ハ其送達アリタルヨリ三日内ニ答辯書ヲ差出スヲ得

第四百五十七條 大審院ニ於テハ第四百五十條ノ規則ニ

從ヒ前條ノ訴ヲ判決ス可シ

○嫌疑ノ爲メ裁判管轄ヲ移スノ訴訟及ヒ裁判ノ手續

一 裁判管轄ヲ移スノ訴ニ付テハ訴ヲ爲ス可キ期限ナキヲ以テ申立書

ヲ要セス趣意書ヲ差出シタル以後ノ手續ハ總テ上告ニ付テ定メタル規則ニ同シ

二 裁判ノ手續ハ裁判管轄ヲ定ムルノ訴ニ付キ定ムル所ニ同シ

第四百五十八條 嫌疑ノ爲メ裁判管轄ヲ移スノ訴アリタ

ル時ハ裁判所ニ於テ其訴訟手續ヲ停止ス

○裁判言渡ヲ移スノ訴ニ因リ原裁判所ニ於テ訴訟手續ノ停止

一 嫌疑ノ爲メ管轄ヲ移スノ訴ハ起訴アリタルヨリ公判ノ終結マテニ之ヲ爲ス可キモノトス但豫審中タリモ訴アリタルモ豫審ヲ停止ス可シト雖モ急速ヲ要スル處分ハ格別ナリトス

二 公安ノ爲メ裁判管轄ヲ定ムルノ訴ニ付テハ原裁判所ニ於テ訴訟手續ヲ停止ス可キヲ定メス然レモ其訴ヲ爲スヤ起訴以前ナルモハ



檢察官ニ於テ起訴ヲ停止シ起訴後ナルキハ檢察官ヨリ裁判官ニ請  
求シテ訴訟手續ヲ停止ス可キハ當然ナル可シ

### 治罪法講義第五編終

### 第六編 裁判執行復權及ヒ特赦

#### ○公判後ノ手續

一 裁判執行ハ言渡ノ効果ニシテ判決ヲ下サ、ル場合ヲ除クノ外豫審  
公判ヲ問ハス又豫審公判ノ終結前後ニ拘ハラヌ如何ナル言渡ト雖  
モ執行ヲ要セサルコトナシ然レモ其執行ハ各本條ニ明文アルアリ又  
當然明文ヲ要セサルアリ此編ニ記載スル規則ハ公判終結ノ言渡ニ  
係ル執行ナリトス

二 復權及ヒ特赦ハ刑ノ言渡ヲ受ケタル者ニ付キ復權ヲ願ヒ特赦ヲ請  
フノ手續ニシテ必スシモ各事件毎ニ行フ可キ規則ニ非ス然レモ是  
亦公判後ノ處分ニ屬スルモノトス

#### 第一章 裁判執行

#### ○公判終結ノ言渡ニ係ル執行



一 公訴ニ係ル言渡ノ執行ハ此章ニ於テ單ニ刑ノ言渡アリタル場合ニ付テノヨキ其規則ヲ定ム故ニ其他ノ言渡ニ係ル執行ノ説明ハ各本條ニ就テ參看ス可シ

二 私訴ニ係ル言渡ノ執行ハ第四百六十九條ニ於テ少シク之ヲ説明ス可シ

第四百五十九條 重罪輕罪違警罪ノ刑ハ裁判確定ノ後ニ非サレハ之ヲ執行ス可カラス

第四百六十條 死刑ノ言渡確定シタル時ハ檢察官ヨリ速ニ訴訟書類ヲ司法卿ニ差出ス可シ

司法卿ヨリ死刑ヲ執行ス可キノ命令アリタル時ハ三日内ニ其執行ヲ爲ス可シ

第四百六十一條 死刑ヲ除クノ外刑ノ言渡確定シタル時

ハ直チニ之ヲ執行ス可シ

○刑ノ執行

一 刑ノ執行ハ執行後之ヲ回復ス可カラサルヲ以テ第四百五十九條ニ裁判確定ノ後ニ非サレハ執行ス可カラサルヲ定ム就中死刑ハ執行後ニ於テハ特赦ノ手續モ無効タル可キヲ以テ裁判確定後ト雖モ直ニ執行スルヲ許サス第四百六十條ニ檢察官ヨリ訴訟書類ヲ司法卿ニ差出シ全卿ノ命令ヲ待ツ可キヲ定ム刑法第十四條第十五條ノ場合ニ於テハ別段ノ事由ニ因リ死刑ノ執行ヲ停止ス刑ノ言渡ト雖モ罰金科料ノ如キハ執行後必スシモ回復ス可カラサルニ非ス然レモ急速ノ執行ヲ要セサルト手續ノ混雜ヲ防ク爲メ仍ホ確定ヲ待テ之ヲ執行ス實際ニ於テ刑ノ言渡ヲ受ケタル者却テ急速ノ執行ヲ要スルコトアリ此場合ニ於テハ裁判確定マテ罰金又ハ科料ノ金額ヲ書記



局ニ預置シテ得

二 刑ノ執行ハ裁判確定ノ後直ニ之ヲ爲ス可キヲ第四百六十一條ニ定ム蓋シ刑期ハ裁判宣告ヨリ之ヲ起算スルヲ以テ直ニ其執行ヲ爲サレハ刑ノ効力ヲ減殺スルニ至ル可シ然レモ死刑ト罰金科料ノ刑トハ然ラス死刑ノ執行ハ司法卿ノ命令アリタルヨリ三日内ニ之ヲ爲ス可キヲ定メ罰金科料ノ納完ハ刑法第二十七條第三十條ノ猶豫期限アリ

第四百六十二條 刑ノ執行ハ原裁判所ノ檢察官又ハ大審院ヨリ命ヲ受ケタル裁判所ノ檢察官ノ指揮ニ因リ之ヲ爲ス可シ  
罰金科料裁判費用及ヒ沒收物品ハ檢察官ノ命令書ニ依リ之ヲ徵收ス可シ

破壊又ハ廢棄ス可キ沒收物品ハ檢察官之ヲ處分ス可シ  
第四百六十三條 死刑ノ執行ニ付テハ書記其始末書ヲ作り刑ノ執行規則ニ從ヒ立會ヲ爲シタル官吏ト共ニ署名捺印ス可シ  
其他刑ノ執行ニ關スル方法細目ハ別ニ規則ヲ以テ之ヲ定ム

○刑ノ執行手續

一 刑ノ執行ヲ指揮スルハ檢察官ノ職務ナルヲ第三十四條第三ノ法文ニテ判然ナル可シ第四百六十二條第一項ハ何レノ裁判所ノ檢察官ニテ指揮ス可キヲ定ム第一裁判執行モ亦管轄ノ規則ニ從フ可キヲ以テ言渡ヲ爲シタル裁判所ニ於テ其執行ヲ爲ス可キハ當然ナリトス本條ニ原裁判所トアルハ始審裁判ノミニテ確定シタルキハ



始審ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ニテ執行シ終審ノ言渡ニテ確定シタルルキハ終審ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ニテ執行ス可キヲ謂フ第二本條ニ明文ナシト雖モ裁判言渡ハ日本全國ニ於テ執行ス可キハ當然ナルヲ以テ刑場所在ノ地又ハ被告人所在ノ地ノ裁判所檢察官ハ囑託ヲ受ケテ刑ノ執行ヲ命スルコトアル可シ第三大審院ニ於テ上告事件ニ付キ直ニ裁判言渡ヲ爲シタルルキハ別段裁判執行ヲ爲ス可キ裁判所ヲ指示スルコトアル可シ何トナレハ未決拘留ヲ受ケサル被告人ノ如キハ必ラスシモ原裁判所所在ノ地ニ住セス其他執行ノ爲メ障碍アルコトナシトセス若シ大審院ニテ別段裁判執行ヲ爲ス可キ裁判所ヲ指示セサルルキハ原裁判所ニ於テ執行ス可キハ當然ナリ

二 總テ体刑ノ執行ハ檢察官ヨリ裁判言渡書ノ謄本ニ執行命令書ヲ添へ犯人ヲ典獄ニ送致ス單リ死刑ハ鄭重ナル法式ヲ用ヒ書記執行ノ始末ヲ記載シ立會官吏ト共ニ署名捺印ス其手續ニ付テハ刑法附則

第一條ヨリ第八條マテ及ヒ監獄則第三十二條第三十三條ヲ參看ス可シ總テ刑ノ執行ニ關スル方法細目ハ刑法附則及ヒ監獄則ニ之ヲ定ム

三 罰金科料及ヒ沒収物品ハ檢察官ヨリ徵收命令書ヲ書記ニ送致シ書記ハ徵收ノ後司法省ヲ經由シテ國庫ニ入ル公訴ノ裁判費用ニ付テモ亦全シ但徵收處分ニ付テハ總テ檢察官ノ指揮ニ從フ

四 破壊ス可キ物品即チ貨幣ノ贋造ニノミ用フ可キ器械ノ如キ廢棄ス可キ物品即チ阿片烟ノ如キハ檢察官自ラ破壊廢棄ノ處分ヲ爲シ又ハ司法警察官ヲシテ共處分ヲ爲サシメ然ル後破壊シタル物品ハ書記ニ交付ス

第四百六十四條 裁判言渡確定シ又ハ關席裁判アリタル時ハ其刑ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ノ書記既決犯罪表ヲ



作り左ノ條件ヲ記載ス可シ但大審院ニ於テ刑ノ言渡ヲ爲シタル時ハ其執行ヲ爲シタル裁判所ノ書記之ヲ作ル可シ

一 犯人ノ氏名年齢職業住所及ヒ出生ノ地

二 罪名刑名

三 再犯

四 裁判言渡ヲ爲シタル年月日

五 對審裁判又ハ關席裁判

第四百六十五條 既決犯罪表ハ二通ヲ作り一通ヲ司法省

ニ送致シ一通ヲ其裁判所ノ書記局ニ藏置ス可シ

違警罪ノ既決犯罪表ハ一通ヲ作り其裁判所ノ書記局ニ

### 藏置ス可シ

### ○既決犯罪表

- 一 既決犯罪表ヲ作ルハ司法統計表ノ資料ニ供スルニ非ス又實際ニ於テ他ノ用タルコアル可シト雖モ全ク裁判上原犯ノ有無ヲ調査スルノ用ニ供ス可キモノトス故ニ刑ノ言渡アリタル事件ニ非サレハ掲載スルヲ要セス之ヲ調製スルハ書記ノ職務ニシテ之ヲ管掌スルハ檢察官ノ職務ナル可シ大審院ニ於テ上告事件ニ付キ直ニ刑ノ言渡ヲ爲シタル場合ハ第四百三十二條ニ從ヒ其執行ヲ命セラレタル裁判所ニ總テ訴訟書類ヲ保存ス可キヲ以テ其裁判所ノ書記ニテ既決犯罪表ヲ作ルハ固ヨリ至當ナル可シ

- 二 既決犯罪表ニ掲載スルハ第一犯人ノ氏名年齢職業住所及ヒ出生ノ地蓋シ本項ノ條件ハ犯人ノ人違ナキコトヲ認ムルニ缺ク可カラサル



モノトス第二罪名刑名蓋シ罪質ニ因リ再犯加重ノ例ヲ適用ス可キト否ヲサルトアリ故ニ罪名ヲ掲載セサル可カラス又罪名アリト雖刑ノ輕重ヲ知ラサルモハ再犯加重ノ例ヲ適用スルニ由ナシ故ニ刑名ヲ掲載セサル可カラス第三再犯蓋シ新刑法ニ於テハ再犯以上ハ犯數ノ區別ナキニ因リ本項ノ條件ヲ掲載スルハ未タ別段ノ事由トス可キ例ヲ見ス舊法ノ再犯例ノ如ク將來三犯以上別ニ刑ヲ加重ス可キ犯罪ヲ定ムルモハ格別ナリトス第四裁判言渡ヲ爲シタル特月日蓋シ本項ノ條件ハ前犯ノ有無ヲ知ルニ必要ナラスト雖モ訴訟書類ノ取調ヲ爲ス等他ニ有用ナルコト少カラス第五對審裁判又ハ闕席裁判蓋シ對審裁判ナルモハ既ニ確定シタル事件ナルヲ以テ再犯ヲ認ムルニ困難ナルコトナシト雖モ欠席裁判ナルモハ確定シタルモノト確定セサルモノトアリ之ヲ詳ニセサレハ再犯ヲ認ムルコト能ハサル可シ

三

既決犯罪表一通ヲ其裁判所ノ書記局ニ藏置スルハ其裁判所所在ノ地ニ本籍ヲ有スル犯人ヲ除クノ外ハ唯其正本ヲ保存スル迄ニシテ別段必要ナルコトアルニ非ス其一通ヲ司法省ニ送致スルハ全國ノ裁判所ヨリ犯人アル毎ニ前犯ノ有無ヲ司法省ニ照會ス可キ爲メナリ然ルニ一々之ヲ司法省ニ照會スルモ却テ不便ナルコトアルヲ以テ現今ニ於テハ其一通ヲ犯人本籍ノ地ノ檢事ニ送致シイロハ標號ニ從ヒ簿冊ニ編入ス可キヲ以テ前犯ノ有無ハ直ニ犯人本籍ノ地ノ檢事ニ照會スルコトナレリ然レモ無籍人ノ如キハ仍ホ司法省ニ照會スルニ非サレハ前犯ノ有無ヲ知ルニ由ナカル可シ違警罪ニ付テハ其裁判所管轄内ノ犯罪ニ非サレハ再犯トセサルヲ以テ既決犯罪表ハ其裁判所ノ書記局ニ之ヲ保存ス

第四百六十六條

刑ノ言渡ヲ受ケタル者其言渡ノ條件ニ

付キ疑義ノ申立又ハ其執行ニ付キ異議ノ申立ヲ爲シタ



ル時ハ刑ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ニ於テ之ヲ判決ス可  
シ

第四百六十七條 刑ノ言渡ヲ受ケタル者逃亡ノ後捕ニ就

キタル場合ニ於テ人違ノ申立アリタル時ハ之ヲ認定ス  
ル爲メ前ニ其罪ヲ認メタル裁判所ニ送致ス可シ

裁判所ニ於テ本犯ナルヲ認定スルヲ能ハサル時ハ事  
實參考ノ爲メ曾テ其事件ニ干預シタル裁判官檢察官書  
記又ハ原被ノ證人ヲ呼出スヲ得

第四百六十八條 前二條ノ場合ニ於テハ公庭ニテ刑ノ言  
渡ヲ受ケタル者ノ申立及ヒ檢察官ノ意見ヲ聽キ裁判言  
渡ヲ爲ス可シ但其言渡ニ對シテハ上訴ヲ許サス

○刑ノ執行裁判

- 一 刑ノ執行裁判ハ總テ刑ノ言渡ヲ受ケタル者ヨリ之ヲ請求ス可キモ  
ノトス何トナレハ執行官ハ必ス自己ノ信認スル所ニ依テ執行セン  
トス可シ且實際ニ於テハ直ニ裁判官ニ照會スルヲ得ヘキ而已ナ  
ラス不明不當ノ言渡ニ付キ上訴ヲ爲サ、ルヲナカル可シ又本案ニ  
付キ無罪又ハ免許ノ言渡ヲ受ケタル場合ト雖別ニ沒収等ノ言渡  
ヲ受ケタル者ハ仍ホ本條ニ從ヒ執行裁判ヲ請求スルヲ得ヘシ
- 二 執行裁判ヲ請求スルヲ得ヘキ場合ハ第一執行ス可キ條件ニ付キ  
疑義アル時第二執行ス可キ條件ニ付キ異議アル時蓋シ疑義ハ言渡  
ノ不備不明ナル場合ニ起リ異議ハ執行ノ不當ナル場合ニ起ルモノ  
トス第三逃亡ノ犯人ヲ捕得シ刑ノ言渡ヲ執行セントスルニ當リ人  
違ナリトスル時蓋シ第三ノ場合ハ第二ノ場合ニ包含シタルヲ以テ  
不用ノ箇條トスルモ不可ナキニ似タリ唯第四百六十七條第二項ノ



規則ハ少シク有用ナリ然レモ假令此規則ナシト雖モ嘗テ其本犯ヲ  
 認知シタル者ヲ呼出スヲ得サルニ非ス必竟注意ノ法文ニ過キス  
 三 執行裁判ハ刑ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ニ於テ公延ニテ刑ノ言渡ヲ  
 受ケタル者ヲシテ先ツ疑義異議又ハ人違ノ事由ヲ申立テシメ檢察  
 官ノ陳述ヲ聽キ之ヲ判決ス茲ニ一箇ノ疑問アリ大審院ニ於テ直ニ  
 裁判言渡ヲ爲シタル場合はナリ若シ大審院ノ裁判言渡ニ對シ疑義  
 又ハ異議ノ申立アリタルモハ仍ホ大審院ニ於テ通常上告ノ規則ニ  
 從ヒ之ヲ判決シ人違ノ申立アリタルモハ原裁判所即チ破毀ニ係ル  
 裁判ヲ爲シタル裁判所ニ於テ之ヲ判決セサル可カラス  
 四 執行裁判ニ付キ上訴ヲ許サ、ルハ人違ノ申立ノ如キハ上等ノ裁判  
 所ヨリモ刑ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ノ判決ヲ以テ最モ適切ナリト  
 ス疑義異議ノ申立ノ如キモ言渡ヲ解明スルハ其言渡ヲ爲シタル裁  
 判所ノ判決ヲ以テ最モ相當ナリトス然レモ其疑義異議ノ申立タル

ヤ裁判所ニ於テ言渡シタル旨趣ノ解明ニ止ラスシテ法律上ノ解明  
 ニ渉ル可キ場合ハ上訴ヲ許スヲ相當ナリト雖モ法律ハ確定シタル  
 裁判ニ付キ仍ホ執行遅延ノ路ヲ開クヲ好マサルモノトス

第四百六十九條 賠償及ヒ訴訟關係人ニ償還ス可キ裁判  
 費用ニ付キ其言渡ノ執行ハ通常民事ノ規則ニ從フ

○私訴ニ付テノ言渡ノ執行

一 賠償ノ言渡ハ賠償ヲ受ク可キ者ヨリ賠償ヲ爲ス可キ者ニ對シ其額  
 ナ請求シ若シ之ヲ肯セサル時ハ言渡ヲ爲シタル裁判所ニ執行裁判  
 ナ求メ仍ホ民事裁判所ニ身代限ノ處分ヲ求ムルヲ得裁判費用ノ  
 言渡ニ付テモ亦全シ其手續ハ總テ通常民事ノ規則ニ同シ  
 二 贓物返還ノ言渡ハ本條ニ明文ナシ何トナレハ官ニ差押ヘタル物件  
 ナルモハ直ニ之ヲ交付シ若シ稀ニ他人之ヲ所持シタル場合ハ直ニ



之ヲ交付セシムルヲ以テ別段ノ手數ヲ要スルコトナシ

百

## 第二章 復権

第四百七十條 復権ノ願ハ刑法第六十三條ニ定メタル期限經過シタル後刑ノ言渡ヲ受ケタル者ヨリ司法卿ニ之ヲ爲ス可シ

復権ノ願書ニハ本人署名捺印シ現ニ住スル地ノ始審裁判所檢事ニ之ヲ差出ス可シ

第四百七十一條 復権ノ願書ニハ左ノ書類ヲ添フ可シ  
一 裁判言渡書ノ謄本  
二 主刑ノ滿期特赦又ハ期滿免除ト爲リタルコトヲ證明スル書類

337044

三 假出獄及ヒ假ニ監視ヲ免セラレタルノ證書

四 賠償及ヒ裁判費用ヲ辨濟シ又ハ其義務ヲ免カレタルノ證書

五 過去現在ノ住所及ヒ生計ヲ記載スル書類

第四百七十二條 檢事ハ願人ノ品行其他必要ノ取調ヲ爲シ前條ノ書類ニ意見書ヲ添ヘ之ヲ控訴裁判所檢事長ニ差出ス可シ

第四百七十三條 檢事長ハ更ニ必要ノ取調ヲ爲シ復権ノ願ニ關スル書類ニ意見書ヲ添ヘ之ヲ司法卿ニ差出ス可シ

第四百七十四條 司法卿ハ復権ノ願ニ關スル書類ヲ檢閱

百一



シ其願ヲ允許ス可キ者ト認メタル時ハ速ニ上奏ス可シ  
 第四百七十五條 勅裁又ハ司法卿ノ意見ニ因リ復權ノ願  
 ヲ棄却シタル時ハ司法卿ヨリ其旨ヲ控訴裁判所檢事長  
 ニ通知シ檢事長ヨリ願書ヲ差出シタル始審裁判所檢事  
 ニ通知ス可シ  
 前項ノ場合ニ於テハ刑法第六十三條ニ定メタル期限ノ  
 半ヲ經過スルニ非サレハ更ニ其願ヲ爲スコトヲ得ス  
 更ニ復權ノ願ヲ爲スニ付テモ亦前數條ノ規則ニ從フ  
 第四百七十六條 復權ノ裁可アリタル時ハ司法卿ヨリ其  
 裁可狀ヲ控訴裁判所檢事長ニ送致シ檢事長ヨリ願書ヲ  
 差出シタル始審裁判所檢事ニ送致ス可シ

檢事ハ裁可狀ノ謄本ヲ願人ニ下付ス可シ  
 又刑ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ニ裁可狀ノ謄本ヲ送致シ  
 其裁判所ニ於テハ之ヲ裁判言渡書ニ記入ス可シ

○復權請願ニ付テノ手續

- 一 刑法ニ復權ノ題名アリ治罪法ニモ亦復權ノ題名アリ刑法ハ復權ノ  
 本則ヲ定メ治罪法ハ復權請願ノ手續ヲ定ム故ニ本章ノ題名ハ復權  
 ノ願ト改ムルヲ相當ナリトス
- 二 復權ノ願ヲ爲スコトヲ得ヘキ人ニ付テハ第四百七十條ニ之ヲ定ム
- 三 復權ノ願ヲ爲スニ付キ具備ス可キ條件及ヒ刑ノ言渡ヲ受ケタル者  
 ノ品行ニ付テハ第四百七十一條ニ其證明ノ方法ヲ定ム
- 四 復權請願ノ書類ヲ差出スノ手續ハ第四百七十條第四百七十二條第  
 四百七十三條第四百七十四條ニ之ヲ定ム



シ其願ヲ允許ス可キ者ト認メタル時ハ速ニ上奏ス可シ  
 第四百七十五條 勅裁又ハ司法卿ノ意見ニ因リ復權ノ願  
 ナ棄却シタル時ハ司法卿ヨリ其旨ヲ控訴裁判所檢事長  
 ニ通知シ檢事長ヨリ願書ヲ差出シタル始審裁判所檢事  
 ニ通知ス可シ  
 前項ノ場合ニ於テハ刑法第六十三條ニ定メタル期限ノ  
 半ヲ經過スルニ非サレハ更ニ其願ヲ爲スコトヲ得ス  
 更ニ復權ノ願ヲ爲スニ付テモ亦前數條ノ規則ニ從フ  
 第四百七十六條 復權ノ裁可アリタル時ハ司法卿ヨリ其  
 裁可狀ヲ控訴裁判所檢事長ニ送致シ檢事長ヨリ願書ヲ  
 差出シタル始審裁判所檢事ニ送致ス可シ

檢事ハ裁可狀ノ謄本ヲ願人ニ下付ス可シ  
 又刑ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ニ裁可狀ノ謄本ヲ送致シ  
 其裁判所ニ於テハ之ヲ裁判言渡書ニ記入ス可シ

○復權請願ニ付テノ手續

- 一 刑法ニ復權ノ題名アリ治罪法ニモ亦復權ノ題名アリ刑法ハ復權ノ  
 本則ヲ定メ治罪法ハ復權請願ノ手續ヲ定ム故ニ本章ノ題名ハ復權  
 ノ願ト改ムルヲ相當ナリトス
- 二 復權ノ願ヲ爲スコトヲ得ヘキ人ニ付テハ第四百七十條ニ之ヲ定ム
- 三 復權ノ願ヲ爲スニ付キ具備ス可キ條件及ヒ刑ノ言渡ヲ受ケタル者  
 ノ品行ニ付テハ第四百七十一條ニ其證明ノ方法ヲ定ム
- 四 復權請願ノ書類ヲ差出スノ手續ハ第四百七十條第四百七十二條第  
 四百七十三條第四百七十四條ニ之ヲ定ム



- 五 復権ノ願ヲ棄却シタル場合ノ手續及ヒ再ヒ復権ノ願爲スヲ得ヘキ期限ト其手續トハ第四百七十五條ニ之ヲ定ム
- 六 復権ノ裁可アリタル場合ノ手續ハ第四百七十六條ニ之ヲ定ム
- 七 復権ノ願ヲ認可スルハ勅裁ニシテ之ヲ棄却スルハ勅裁及ヒ司法卿ノ職權ニ屬ス

第三章 特赦

第四百七十七條 特赦ハ刑ノ言渡確定シタル後何時ニテモ檢察官又ハ監獄長ヨリ犯人ノ情狀ヲ具シ司法卿ニ申立ルヲ得

監獄長ヨリ特赦ノ申立ヲ爲ス時ハ檢察官ヲ經由ズ可シ但檢察官ハ意見書ヲ添フ可シ

特赦ノ申立アリタル時ハ司法卿ヨリ其書類ニ意見書ヲ

添へ上奏ス可シ

第四百七十八條 司法卿ハ刑ノ言渡確定シタル後何時ニテモ特赦ノ申立ヲ爲スヲ得

死刑ヲ除クノ外特赦ノ申立アリト雖モ刑ノ執行ヲ停止セス

第四百七十九條 特赦ノ申立棄却アリタル時ハ司法卿ヨリ刑ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ノ檢察官ニ其旨ヲ通知ス可シ

第四百八十條 特赦ノ裁可アリタル時ハ司法卿ヨリ刑ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ノ檢察官ニ特赦狀ヲ送致ス可シ此場合ニ於テハ第四百七十六條ノ規則ニ從フ



○特赦申立ノ手續

- 一 特赦ノ申立ヲ爲スヲ得ヘキ人ニ付テハ第四百七十七條第一項第四百七十八條第一項ニ之ヲ定ム佛國ニ於テハ刑ノ言渡ヲ受ケタル者モ亦特赦ノ申立ヲ爲スヲ許セリ頗ル人情ヲ満足セシムルノ方法ナリトス然レモ實際無益ノ手數ト費用トヲ増加スルヲ免カレヌ故ニ此治罪法ニ於テハ之ヲ省キタルナラン
- 二 特赦ハ國君ノ思料ニ屬ス可キ者ナルヲ以テ別段原由ヲ定ムルヲナシ申立ノ手續ハ第四百七十七條第四百七十八條ニ之ヲ定ム
- 三 特赦申立ハ刑ノ言渡確定シタル後刑ノ執行中ト雖モ之ヲ爲スヲ得然レモ死刑ニ付テハ刑法第十三條ノ規則アルヲ以テ特赦ナキヲ判然タル後ニ非サレハ其執行ヲ爲スヲ許サズ即チ第四百七十八條第二項ノ規則ヲ定ムル所以ナリ
- 四 特赦ノ申立棄却アリタル場合ノ手續ハ第四百七十九條ニ之ヲ定ム

- 五 全條ニ依ルニ特赦ノ申立棄却アリタル旨ヲ刑ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ノ檢察官ニ通知スル迄ニシテ別段棄却狀ヲ下付セサルハ至尊ニ對シ不慈ノ痕迹アルヲ忌ム所以ナリ
- 五 特赦ノ裁可アリタル場合ノ手續ハ第四百八十條ニ之ヲ定ム



法律學叢書

五  
其  
全  
...

明治十三年九月二日版權免許  
同 十六年二月出版

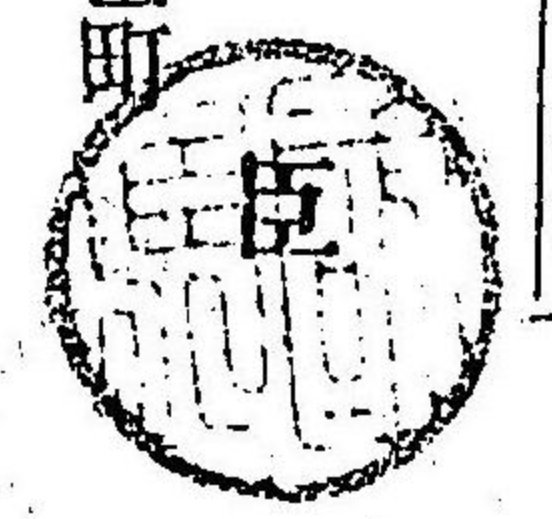
定價金六拾錢

口 述

大分縣平民

橫 田 國

東京麴町區元園町  
一丁目七番地



筆 記  
兼 出 版 人

大分縣平民

高 瀬 四

東京麴町區飯田町  
四丁目十六番地



發 兌

官版刑法治罪法發賣取扱所

原 亮 三 郎

東京日本橋區本町  
三丁目十七番地

賣 捌 人

大坂唐物町  
兵庫縣兵庫  
岐阜縣岐阜

金 港 堂



賣

東京芝區三島町  
全 日本橋西川岸  
全 日本橋通壹丁目  
全 二丁目  
全 三丁目  
全 南傳馬町

捌

全 銀坐二丁目  
全 四丁目  
全 芝區櫻田本郷町

書

全 芝口壹丁目  
全 本町貳丁目  
全 通り油町  
全 馬喰町  
全 淺草茅町  
全 大坂備後町

肆

全 北久太郎町  
全 南久寶寺町  
全 本町四丁目

山中市兵衛  
須原鉄二  
須原屋茂兵衛  
山城屋佐兵衛  
九屋善七  
吉川半七  
有隣堂  
山中孝之助  
博聞社  
金鱗堂  
牧野善兵衛  
中外堂  
藤岡屋慶二郎  
石川治兵衛  
須原屋伊八  
吉岡平助  
梅原龜七  
柳原喜兵衛  
前川善兵衛  
岡島眞七

兵庫縣神戸  
西條三條寺町  
尾州名古屋玉屋町  
全  
美濃國大垣  
全 岐阜  
飛彈高山  
勢州四日市  
全 神戸  
近江國彦根  
豐前國中津  
筑前福岡  
全

肥後國熊本  
德嶋縣德島  
山口縣山口  
愛媛縣丸龜  
筑後國柳川  
淡路國順本

新野依歷三  
野依歷三  
林依歷三  
近江屋周助  
長崎次郎  
阪井萬吉  
宮川臣吉  
日新社市原  
十時勝馬  
廣瀬英太郎

矢島金八  
樹屋忠助  
十一屋半四郎  
目黒十郎  
松田周平  
上田屋治平  
西村六平  
堀治作  
伊丹屋藤吉  
目黒宗内  
室直三郎  
本多勝太郎  
小方長吉  
中村喜平  
伊勢安右衛門  
博文書院  
五十嵐太右衛門  
市村屋五郎兵衛  
風間五右衛門  
地主文藏

船井政太郎  
杉本甚助  
川瀬代助  
鬼頭平兵衛  
片野東四郎  
岡安慶助  
春陽社  
榊屋重兵衛  
伊東善太郎  
杉野佐左衛門  
新野依歷三  
野依歷三  
林依歷三  
近江屋周助  
長崎次郎  
阪井萬吉  
宮川臣吉  
日新社市原  
十時勝馬  
廣瀬英太郎

賣

鹿兒島縣鹿兒島  
日向國延岡  
駿州靜岡

捌

全 沼津  
全 遠州掛川  
全 濱松  
全 甲州甲府

書

全 信州長野

肆

全 上田  
全 小諸  
全 白田  
全 信州松本南深志町  
全 上諏訪

吉田幸兵衛  
遠山眞一  
廣瀬市造  
三浦屋定吉  
青木榮二郎  
吉成壽三郎  
三原屋甚藏  
白木健二郎  
內藤傳右衛門  
徵古堂  
西澤喜太郎  
協和堂  
鼠屋甲造  
小山九郎兵衛  
依田儀三郎  
高美屋甚左工門  
竹内禎十郎  
水琴堂  
藤森平五郎  
宮阪喜與二

全 高遠  
全 飯田  
全 越後國長岡  
全 水原  
全 新瀉  
全 越後國地藏堂  
全 六日町  
全 高田

全 宮城縣仙臺  
全 羽前國山形  
全 米澤宮村  
全 羽後國鶴ヶ岡

全 加賀金澤  
全 宮城縣仙臺  
全 羽前國山形  
全 米澤宮村  
全 羽後國鶴ヶ岡

全 加賀金澤  
全 宮城縣仙臺  
全 羽前國山形  
全 米澤宮村  
全 羽後國鶴ヶ岡

全 加賀金澤  
全 宮城縣仙臺  
全 羽前國山形  
全 米澤宮村  
全 羽後國鶴ヶ岡



全 秋田  
 全 賣  
 全 渡島函館  
 全 野州初木  
 全 上州高崎  
 全 桐生  
 全 高崎  
 全 沼田  
 全 境町  
 全 館林  
 全 太田  
 全 武州鴻巣  
 全 武州越川  
 全 武州所澤  
 全 八王子  
 全 肆

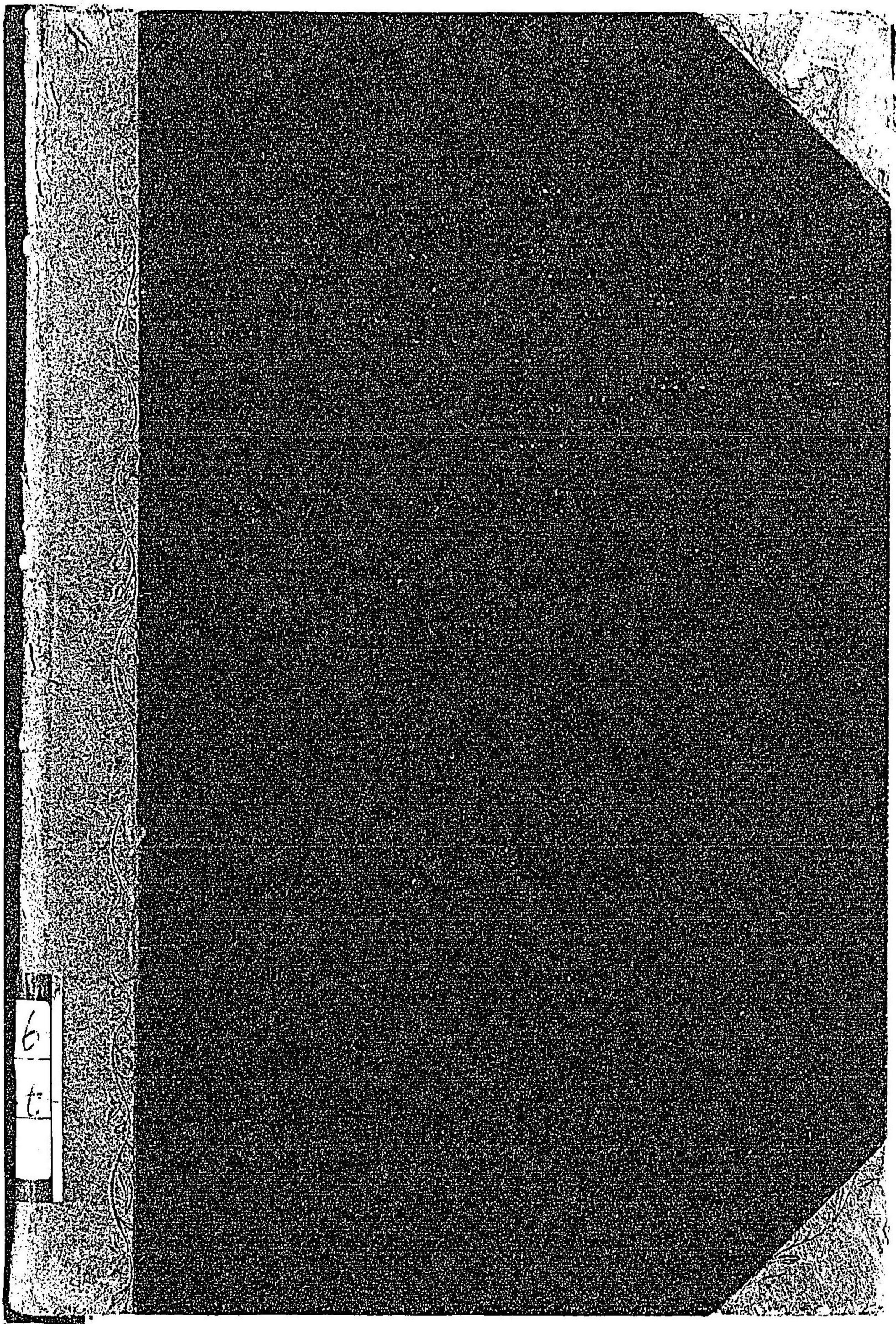
本間金之助 相州藤澤  
 高堂善三郎 全 橫須賀  
 土屋善三郎 常州水戸上市  
 魁文社 全  
 小林八郎 全 石岡  
 叶屋儀右衛門 全  
 煥乎堂常造 全 土浦  
 白木屋藤吉 全  
 文心堂量平 全  
 塚田屋佐太郎 全  
 山田屋金兵衛 全 北條  
 永井貞二 常州下館  
 糸屋太吉 全 江戸崎  
 高橋鷄三郎 下總水海道  
 高橋波太郎 全 境町  
 長島爲一郎 全 結城  
 明文堂定二郎 全 千葉  
 大國屋佐兵衛 上總木更津  
 高島惠造  
 小町屋德二郎

川上九兵衛  
 竹川新四郎  
 川亦銀造  
 松信善之助  
 近江屋清助  
 中村市兵衛  
 間原平右衛門  
 寺田新助  
 大國屋彌助  
 柳且彌堂  
 茂在彌惣二  
 八幡屋幸助  
 泉屋半兵衛  
 新口堂爲吉  
 高木直二郎  
 長崎屋平八  
 乙亥社  
 鈴木長兵衛  
 東京本町三丁目  
 金港堂發兌



立法  
29.10.2 S  
胡查立法考研局

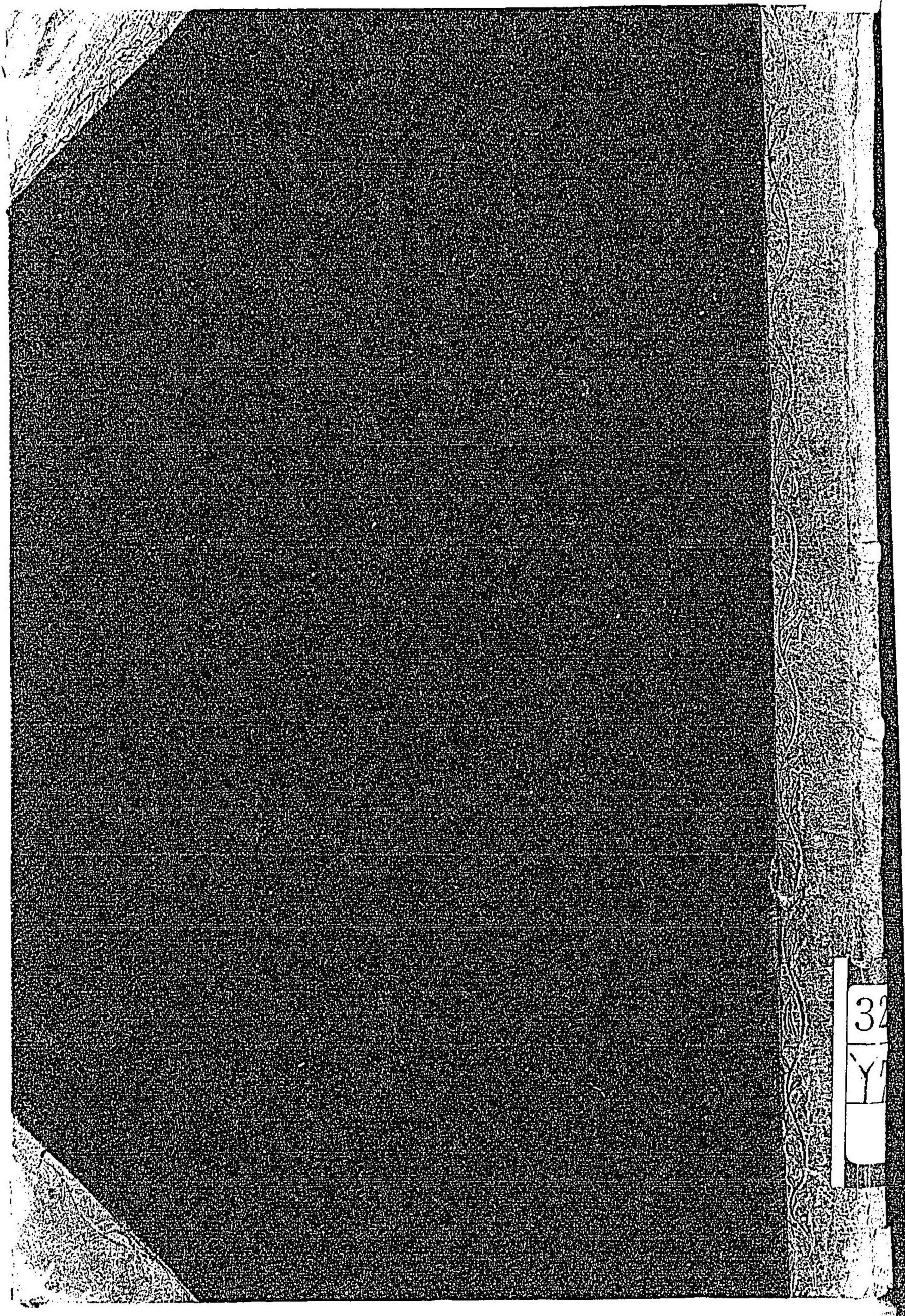




6

t





32

Y



